筑波大学新聞

第285号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
荻野祥三
TEL:
029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@
sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

ブランディングプロジェクト始動

卒業生が全面バックアップ

本学のブランド化が今年度から本格的に進んでいる。山田信博学長が昨年4月の就任以来押し進めていた「筑波ブランド」の構築が、スローガン「IMAGINE THE FUTURE.」（開かれた未来へ。）と共に大きく動き出した。

本学は、各界で活躍する多くの卒業生を輩出し、高水準の研究成果を上げている。しかし「地味」「まじめ」といったイメージが強く、本学らしいアイデンティティが社会に認知されていなかった。今回のブランド化で、大学から積極的に情報発信することで、社会とのつながりを強化し、本学の価値を学内外に示すことをねらいとする。

スローガンは、本学の一期生でコピーライターの一倉宏さん（昭和52年度入文学類卒）が制作。先月8日に行われた大学式の式辞の中で、学長からお披露目された。ロゴがデザインされた4色5種類のクリアファイルやトートバッグなどのグッズも新入生に配布され、学内への周知が進んでいる。先月1日から運用が開始された「筑波大学基金TSUKUBA FUTURESHIP」もブランド化の一環で、スローガンの一部をとって命名された。

今回のブランド化は、1月30日に行われた第14回茗渓・筑波グランドフェスティバルで学長と一倉さんが大学のブランド化について対話したのがきっかけ。学長の意を受け、一倉さんが原案を作成する形で本格化した。一倉さんを始めとする本学卒業生や関係者らのボランティアの全面バックアップの下、西川潔副学長（UI担当）、原忠信講師（芸術）や広報室がその任にあたっている。今後は、オリジナルソングのCD制作やグッズの販売を検討中だ。

今後の広報戦略について西川副学長は、「あらゆる場面でスローガンを反映させ、ことばをシンボルマークにしていきたい。これを機に、学生に本学生としての誇りをもってほしい」と話し、大学をあげてのブランド化に意欲をみせた。

◆大学のブランド化＝大学全入時代を迎え、私立大、国公立大問わず、多くの大学がブランド戦略として、「UI（ユニバーシティアイデンティティ）」を活用している。社会に対して、大学の確固たる理念や、イメージ像の確立が必要不可欠な時代となった。

「学生と価値観を共有したい」と熱く語る

学長インタビュー　「筑波ブランド」を問う

未来を見つめ直すきっかけに　理念を共有し、社会に発信へ

今年度からのブランド化本格始動を受け、就任当初から「筑波ブランド」構築を掲げていた山田信博学長に、ブランド化の真意について聞いた。

―学長ご自身の本学のイメージとは。

誰もが自由でのびのびとしている「開かれた」大学だと思います。学生と教員の距離も近く、研究室の頻繁な行き来があるといいます。しかし、今の若い学生に本学のイメージを聞くと「閉ざされている」と言うそうです。「都会ではない」「隔離されている」など理由はさまざまだと思いますが、社会からの評価は非常に高く、それこそ、社会に出てみれば分かりますよ。

―本学のPRポイントとは。

本学には7つの特徴があります（図参照）。この7つこそが、本学の遺伝子だと思います。これらの魅力、価値を私たちがよく理解すべきです。本学の理念、そして遺伝子を本学の構成員（未来へ。）です。全てと共有出来たら、もっと社会に発信出来たら、とブランド化を考えました。そのためのスローガンが、「IMAGINE THE FUTURE」（開かれた未来へ。）です。

―「IMAGINE THE FUTURE.」に込められた思いとは。

大学で学び、考え、思いめぐらす（IMAGINE）、そこから行動、表現することで未来（FUTURE）を創造していく、と私は考えます。また、これは一倉さんからの大学に対する激励ではないかとも思います。環境破壊などで瀬戸際に立たされる地球を「未来への知の拠点」である大学として何が出来るのかを追られているように感じました。未来を構想する大学としての建学の理念が、このスローガンに体現されていると思います。

―本学の改善しなければならない点は。

今の大学、教育現場には「ゆとり」が足りません。「知の拠点」としての致命的危機だと思います。「ゆとり」のない状況で、さまざまな可能性を持った若い学生の将来を伸ばしていけるのでしょうか。未来を見ている大学として、この状況に警鐘を鳴らすのもブランド化ではないでしょうか。「ゆとり」をつくるためには、大学と教員、教員と学生のお互いの「自他共栄」の精神が必要だと思います。

―本学をブランド化することで何がメリットはあるのでしょうか。

ブランド化は決して人に押し付けるものではありません。学生、教職員らそれぞれが個々に持っている本学の価値観を共有し、一つの方向に持っていければと思っています。スローガンを通して、もう一度自分の未来を見つめ直してほしい。それがさらに本学の価値を高め、社会からの応援を得ることにつながると思います。

―不安定な社会情勢の中、FUTUREを明るくIMAGINEしようとする学生へエールを。

本学生は社会の「理不尽」にも物申せるような、社会の規範であってほしい。未来はいつも流動的なため、全員で考え創造するものです。今、出来ることを精一杯してほしいと思います。未来に何が出来るのか、批判ではなく提案してください。失敗を恐れず、未来を開拓してほしい。それこそが「筑波魂」です。（本紙・光安素子＝人文学類）

筑波大学　7つの遺伝子

①あらゆる意味で開かれている
②新しく学際的な領域の研究創造
③国際的（全国有数の留学生受入）
④300の研究機関を持つ研究学園都市の中核
⑤緑に囲まれた美しいキャンパス
⑥体育・芸術の専門学群を有する総合大学
⑦11の附属学校を持つ

入学式

無限の可能性語る

平成22年度の学群・理療科教員養成施設の入学式が、先月7日午前9時半と午後11時半からの2回に分け、大学会館講堂で行われた。今年度の入学生は学群が2355人、大学院が225＋0人、理療科教員養成施設が21人だった。

山田信博学長は式辞で、「皆さんの未来には無限の可能性が広がっている。皆さんと共に筑波ブランドを成長させていきたい」と話した。式辞が述べられる間、ステージの上には本学の新しいスローガン「IMAGINE THE FUTURE.」の文字が映し出された。

入学式に参加した宮崎裕多加さん（社学1年）は「オーケストラの演奏に圧倒された。式に参加して、大学生になった実感がわいた」と話した。

ステージ上に映されたスローガン

オリジナルソング

参加者を募集

スローガンの学内外への発信を目指す「TSUKUBA BRANDING PROJECT」では、メッセージソング「IMAGINE THE FUTURE」の歌い手、コーラス、演奏者を募集している。

作詞を一倉宏さん、作曲を吉川洋一郎さん（昭和51度入学）が担当。穏やかな旋律と共に、未来を見据えようとする本学の姿勢を強く訴えている。2011年春には、CDリリース、マスコミ発表も予定される。

この曲は、学生・教職員・卒業生など本学関係者の協力を得て完成する。CD、ポスター、映像制作への参加、協力も呼び掛けている。CDの収益金は、「筑波大学基金TSUKUBA FUTURESHIP」に寄付される見込みだ。

紙面から

最先端研究開発プログラム　本学が支援拠点に　2
JAMBIO設立　井上博士が記念講演　2
第18回天一大風　和の伝統文化味わう　5
全日本選抜柔道　6人が世界選手権へ　8
国際テニストーナメント　国公立大で初の主催　9
バンクーバー　金メダリストら来校　11
ミニ特集　3
フィルムから見たつくば
特集　6,7
筑波大生の生活に喝
まずは敵を知ることから

筑波おろし

GWを終え、実家からつくばに戻ってきた新入生も多いことだろう。僕も久しぶりに両親から電話があった。「身体は大丈夫か」と言う母。「夏休みには海外に一人旅したがいい」と言う父。以前は干渉的でうっとうしくもあった父の言葉が今回は素直に聞けた。▼両親は子供にとって一番近い存在である。しかし昔から子供は親の期待を煩わしくも感じてきた。その根底には、親が子供の未来に期待することと今子供がやりたいことの間にずれがあるからではないか▼大学時代は将来の自分を左右する重要な時期だ。本学では「IMAGINE THE FUTURE」というキャンペーンが始まっている。自分の未来を切り開くために、僕もいつの間にか一人旅をしたくなってきた。家に帰って地図の学生時代、一人旅をして何か得るものがあっただろうか。今度機会があれば、自分から聞いてみよう▼僕が夏休みに旅をして、列車に乗っていたとする。車窓には今まで見たことのない風景が広がっている。何も意識しなければそれは無意味なものになるし、少し工夫を凝らせばそれは一生忘れられないものにもなる。よく人生は旅と同じであるという。どうせならFUTUREをIMAGINE出来るような有意義な旅がしてみたい。

最先端研究開発支援プログラム

本学が２件の支援拠点に選出

国の援助で世界トップ目指す

上海万博にＨＡＬ出展

本学は、世界のトップを目指す研究を国が大規模に援助する、最先端研究開発支援プログラム30件のうち2件の研究支援機関として選ばれたと、先月22日に発表した。このプログラムは、日本の中長期的な国際競争力の向上、及び研究成果の国民、社会への還元を目的に、国が最先端研究を支援する制度だ。

山海嘉之教授

本学が支援拠点となるのは山海嘉之教授（知機）らの「健康長寿社会を支える最先端人支援プログラム」と柳沢正史客員教授（米・テキサス大）らの「高次精神活動発現の分子基盤の解明とその制御法の開発」。

上海万博で出展されるＨＡＬ試作機

すでにプログラムごとにサポートチームが活動を始めており、研究により取り組みやすい環境を整備している。支援の内容は予算管理から研究の広報まで、多岐にわたる。支援期間は2件とも2014年3月までとなっている。

山海教授が中心のプログラムは、支援額23億3600万円。同教授が開発し、体が不自由な人などの動作を支援するロボットスーツＨＡＬの研究開発をさらに進める。2011年3月に完成予定の「サイバニクス研究センター」を拠点として、本学および国内外から研究者を集めるという。

柳沢客員教授の研究は、支援額18億円。睡眠、覚醒などのメカニズムを研究の対象としており、高次精神活動を制御する手法を確立することが目的だ。生活習慣病、精神疾患の治療や予防にも役立つのではと期待されているという。

◇

本学の山海教授らは、「ロボットスーツＨＡＬ」の新しい試作機を発表した。試作機は全身に装着して使用するタイプのもの。従来のものに比べ、大幅に出力が向上し、両腕で約100キロの重量を持ち上げられるという。

これまでロボットスーツＨＡＬは体の不自由な人を支援することを主な目標としてきたが、今回の試作機では、介護現場など、体に負担のかかる作業を支援することも視野に入れているという。研究開発などを共同で行っている本学発のベンチャー企業、サイバーダイン社と共同で、2、3年後の実用化を目指す。

ロボットスーツＨＡＬは、筋肉を動かす際に皮膚に表れる微弱な電気信号を読み取り、装着した人の意図に沿うよう動くことで人の動きを支援する。今回の試作機はこれまでに比べ、モーターの出力と数を増やし、出力を向上させた。ロボットの重さは28キロあるが、ロボット自体が重さを支える構造のため、装着者はロボットの重さを感じないという。

今回の新しく試作したロボットスーツＨＡＬは、現在開催中の上海国際博覧会（上海万博）に出展される。5月19―23日には、ロボットが動く様子を実演する予定だ。

山海教授は、「今まではヨーロッパ向けが多かったが、これをきっかけにアジアで本格的にＨＡＬを展開していきたい」と語った。

JAMBIO設立記念講演会

井上博士が細胞分裂語る

マクロな見方も大切に

海洋生物研究や調査の拠点を目指すマリンバイオ共同推進機構（JAMBIO）の設立記念に、米国ウッズホール海洋生物学研究所の井上信也博士を招き、先月9日に大学会館特別会議室で特別講演会が開かれた。

博士は、1948年に茶筒などを利用して偏光顕微鏡を自作。それを使い、それまで存在が証明されていなかった細胞の分裂装置を生きた状態で見ることに成功し、2003年には国際生物学賞を受賞した。

演題は「How doＩ ivingcell de vide?（生きた細胞に聞く分裂のカラクリ）」。講演は、博士が初めて作った偏光顕微鏡の設計図や、ユリの花粉やウニの卵などの細胞分裂の動画などをスライドで見せながら行われた。偏光顕微鏡は光学顕微鏡の1種で、試料に偏光（特定の振動方向をもつ光波）を照射し、試料の中の結晶や特定構造を観察することが出来る。偏光顕微鏡の精度の上昇や、ビデオを使うことで細胞構造が観察しやすくなることも語り、訪れた人たちは、うなずいたり、時々感嘆の声を上げたりしながら、聞き入っていた。

質疑応答では、井上博士が一つひとつの質問に丁寧に答えた。今後の細胞研究の展望に関する質問には、「近年はさらにミクロへという傾向があるが、いろいろな生物の細胞を見るというマクロな視点も大事」と答えた。品川区から来た女性は「ビデオが生きたものを見るのに役立つということが面白かった」と話した。

ＪＡＭＢＩＯは本学下田臨海実験センターと東京大学海洋基礎生物学研究推進センターが共同で運営する組織である。昨年6月に文部科学省共同利用・共同研究拠点（ネットワーク型）に認定された。拠点名は、海洋生物学研究共同推進拠点だ。認定期間は、今年度から6年間である。

特別講義「大学と学問」

学長らが講師に

大学は社会貢献を

毎週各界の著名人を招いて講義が行われる「筑波大学特別講義―大学と学問―」。先月14日の第1回講義では、山田信博学長から本学のフランド化に関する話などがあり、講義の最後には大学のオリジナルソングが発表された。

28日には田中敏副学長（財務担当）による講義が行われた。題目は「科学技術戦略と国立大学財政事情」。事業仕分けなどで財源の確保が難しい今日、計画段階の科学技術を実現させるには、どのような戦略が必要なのかを話した。

田中副学長は自身がこれまでに携わってきたプロジェクトを例に、科学技術政策決定の構造について語り、「日本の科学技術は産業界との関わりが深く、民間より大学での基礎研究が重要である」と述べた。

講義の後半では、本学を含む国立大学法人の財源について語った。大学が国からの運営費交付金に依存している実情を挙げ、「教育や開発の面で、大学は社会に貢献する責任がある」と述べた。また、本学生は私立大生に比べ、学生一人当たりの経費が多いこと、その経費は授業料の約5倍であることに触れ、「学生には大学からの支援を最大限活用してほしい」と述べた。

講義を聞いた深山大輔さん（応用2年）は「国立大には多額の税金がかけられていることを知った。それらを十分に活用して、自分の糧にすることが、国立大生の義務であり、権利であると思った」と話した。

第55回科学技術週間

学内でイベント開催

研究者と交流する場面も

第55回科学技術週間（4月12―18日）に、本学もさまざまなイベントを開催した。科学技術週間は、科学技術の振興を図り、広く一般の人々に理解と体験を深めてもらうことを目的に、毎年発明の日（4月18日）を含む、月曜日から日曜日の1週間に定められている。

■環境を守るための科学と技術

数理物質科学研究科が主催の「環境を守るための科学と技術」が先月18日に総合研究棟B1階で開かれ、市内の中学生や家族連れを中心に多くの人が訪れた。会場では体験実験やポスター展、実験室ツアーが行われ、大学院生などから来場者に研究で使われている器具やクリーンな燃料電池の仕組みについて紹介。大学院生らが一日の大半を研究室で過ごすという話を披露すると、驚きの声があがった。

体験実験では、ホタルなどの生物が発光する仕組みを実験。実験に成功した子供たちは笑顔を見せていた。

今回の行事を主催した中村潤児教授（物創）は「今の科学少年と昔そうだった研究員が触れ合う良い機会だ。科学が好きな子どもたちが将来社会の役に立つ人材に育ってほしい」と話した。

興味深そうに実験する中学生

■スパコン一般公開

本学の計算科学研究センターが先月17日に一般公開された。見所はスーパーコンピュータ、PACS―CSと昨年国産計算で当時の世界記録を樹立したT2K―Tsukubaだ。

来場者らはスパコンについての疑問、質問を職員に投げかけながら見学をした。スパコンと空調設備から響く「ゴォー」という音が来場者を驚かせた。また、「省エネ対策のため、命令が1時間ないと自動的に電源が切れるようになっている」という話を興味深そうに聞いていた。東京から来ていた会社員の関口徹さんは「事業仕分けで話題になったパソコンを見てみたかった。思ったよりも広いところで、設備もすごかった」と話した。

スパコンを撮影する高校生

■遺伝子実験センター一般公開

本学の遺伝子実験センターが先月17日に一般公開された。同センターでは、遺伝子組換え植物の有用性と安全性を一般の人に伝える取り組みに力を入れており、今回の一般公開はその一環でもある。

職員によるガイドツアーでは、遺伝子組換え植物の厳しい管理体制などについて聞きながら実験場を回った。今回公開されたのは耐塩性のユーカリや酸味を甘味に変えるたんぱく質ミラクリンを含んだトマトだ。

ミラクリンの効果を体験する実験では、ミラクリンを含む果物を食べた後でレモンを食べると甘く感じられることに来場者は驚いていた。

遺伝子組換え植物を見る来場者

■ドライブシミュレーター

本学の伊藤誠准教授（リスク）らの認知システムデザイン研究室が先月17日、公開された。当日はドライビングシミュレータへの試乗などが行われた。

試乗では直線道路を走行中に、歩行者に見立てた障害物が突然出現する設定。車が自動でハンドル操作を手助けする機能の有無や、横滑り防止機能が車の動きや運転にどのような影響を与えるのか検証した。

同研究室では、交通社会の安全性を高めるため研究を進めている。伊藤准教授は「小型の移動機器が普及すると思われる将来の交通社会に向け、より安全な交通を研究したい」と語った。

中田　祝夫氏（なかだ・のりお＝本学名誉教授） 4月13日、死去。94歳。喪主は長男・嘉種さん。

1961年東京教育大学教授。76年本学文芸・言語学系教授。89年勲三等旭日中綬章。

松井　茂氏（まつい・しげる＝本学講師） 4月17日、死去。56歳。喪主は妻・暁子さん。

89年本学物理工学系講師。04年数理物質科学研究科講師。

フィルムから見たつくば

TAKE 1

映画、CM、ドラマの撮影ロケ地として、年間80作品以上の撮影が行われるつくば市。普段何気なく見ている景色も、実は意外な場面で使われているかもしれない。今回はフィルムから見たつくばの魅力に迫った。（本紙・堀木陽子＝人文学類、西川大照＝社会学類、加藤茂行＝地球学類、扇本剛司＝社会工学類）

撮影誘致

「映画やテレビのエンドロールで名前が流れた時にやっと達成感を感じる」とつくばフィルムコミッション（FC）の石濱光輝さんは胸を撫で下ろす。

4年前、つくばの豊かな地域資源を映画やTVを通し全国に紹介するため、つくばFCが市の事業として立ち上げられた。発足当初は、わずか3名の職員で始動したつくばFC。市内の映画撮影に関する事を一手に引き受けている。「つくばの知名度を定着させる仕事に戸惑った。始めは撮影側にまともに取り合ってもらえなかった」と石濱さんは振り返る。

仕事は撮影協力の問い合わせから始まる。こちらから制作会社の要望にあうロケーションを紹介する。ロケ地案内、エキストラ配属に至るまで、何度もやりとりを重ねるが、実際に撮影されたモノが放映されるかどうかは分からない。「ロケ地の写真を送っても、そのまま返信がないことがしばしば。ロケ班の視察が好感触であっても日程が合わないからと、取りやめになることの方が多い」とロケーションスタッフの土田真子さんは語る。

撮影側が求めるものを提供するために、苦労は絶えない。要望の中には、夜中のシーンの撮影がしたいということで真夜中に撮影が行われることもあった。「好きでなければ、続けられない。最後の最後まで、実際に出来上がった映像を見て、やっと撮影がうまくいったことが確認出来る」と仕事の喜びを味わう。

そんなつくばFCの努力の結果もあり、撮影問い合わせ件数が昨年には300件を超え初年度の倍になった。東京からの交通の便の良さに加え、中心部の近代的な街並み、筑波山など自然豊かなロケーションは撮影に打ってつけだと「またつくばで撮影をしたい」とリピートされることも増えてきたという。

登録エキストラ数も1000人を超えた今年。撮影誘致を協力するロケーションサポーター50人にも支えられ、今後は近隣のFC（常総市や取手市など）との連携を強め、つくばにはないロケ地での撮影を紹介する。これからも多くのロケ地が生まれるよう誘致に励んでいく。

素敵なカフェ

南フランス風の建物に、色とりどりの花が咲くガーデニング。インテリアや、リングで閉じられた小さなケーキのメニューなど、細かな部分まで趣向が凝らされた店内の雰囲気はとても居心地が良い。

「PLUS－1 CAFE GARDEN」は、桜地区の一画にある喫茶店だ。クリーム色の爽やかな外壁が目をひく。この喫茶店は昨年の4月から10月にかけて放映されたトヨタ・パッソの撮影地として使用された。かわいらしいテーマソングが印象的なこのCM。加藤ローサ演じる主人公が、友人におすすめのカフェや男友達、そして車を紹介するという内容だ。

車のCMということで、店の前に大きな駐車場があること、店内に機材を運び込んで撮影できるだけの広さがあることが条件となっており、数件の候補のうちから選ばれた。異国を思わせるようなユニークな外観も、決め手の1つとなったようだ。

連絡を受けてから1カ月後。撮影は準備も含め1日かけて行われた。朝から準備が始まり、店内のテーブル以外の物を全て外に運び出した。代わりに別の椅子やカラフルなテーブルクロスなどが設置された。CMではケーキバイキングをしているような設定であったため、大型の冷蔵庫目一杯のケーキが準備され、テーブルに並べられた。撮影当日は時折小雨も降る曇天で薄暗かったが、工事現場のような大きなライトや反射板を用いて、まるで晴天であるかのような演出が施された。

撮影は夜まで行われ、1つのシーンを納得いくまで何度となく撮り直しが行われていたという。撮影で使用されたケーキは近所の人に配られた。

店員は「思いがけない話で驚いた。撮影地として選ばれたこと、お店が全国ネットで流れていることはとてもうれしい。たった30秒のために多くの人が努力していてすごい」と語った。お客さんからの評判もよく、写真撮影をする人もいる。撮影中通りかかった人から後日問い合わせが来たり、放送が始まってからも電話での問い合わせが寄せられているという。

撮影機材が運び込まれ、店内風景は様変わりした

2009 つくばロケ地年表

4月 CM「トヨタ自動車パッソ」（クレオ、プラス1カフェ etc.）

5月ドラマ「スマイル」（筑波ふれあいの里）

6月ドラマ「アイシテル～海容～」（谷田部庁舎）

7月企業VP「NTT東日本」（JAXA etc.）

8月映画「海猿3」（国際会議場多目的ホール）

9月映画「アウトレイジ」（北部工業団地内）

10月VP「パナソニック住宅用火災報知器」（北太田一般住宅）

11月ドラマ「龍馬伝」（金村別雷神社）

（つくばFC情報提供、公開予定含む）

出演者の体験話

つくばFCのエキストラとして撮影に出演しているつくば市在住の会社員、渡邊直樹さんに撮影での実体験を語ってもらった。渡邊さんは日々の仕事の合間をぬって土日や夜間に参加している。

―今までどれくらい出演したのですか？

5年前からすでに何十回も参加しています。NHKからテレビ東京まで首都圏キー局は全制覇しました。

―エキストラとはどのようなことをするのですか？

通行人や喫茶店の客、警察官などをやりました。要は、配役は問わず、そのシーンにおける雰囲気を演じる役、現場の背景となる役を演じます。ただ、撮影の時間は時と場合、自分と相手の都合、天候によって変わります。

―どんな雰囲気の中で撮影されているのですか？

和気あいあいとした雰囲気で楽しんでやることもあれば、監督が怒鳴ったりして重苦しい時もあります。たまに俳優の人が話しかけてくれる時もあります。

―今までの撮影の中でできつかった作品はありますか？

時代劇の撮影で、寒い中、ボロボロの服を着て演じるのはつらかったです。あと、かつらは締め付けが強くてきつかったです。

―今までの撮影の中で驚いたことはありますか？

見ている側は普段どのように撮影されているのかわかりませんが、それらを知ることが出来ました。1コマを撮るのにたくさんの大道具やキャスターを使って、ドラマでは1分間のシーンに2、3時間かけて撮ることもありました。朝の6時から真夜中の12時まで撮影をしていたこともあります。

―普段見慣れた風景に撮影隊が入るとどんな感じですか？

例えば竹園公園での撮影。普段は子どもらお年寄りまでいろいろな人がいます。しかし、撮影では1つのドラマのシーンとして誰もいなくなります。市役所を警察署として撮影した時は、全員警官服で、そこが本当の警察署のようでした。また、時代劇の撮影で上げてしまい、これはすごいと思いました。

つくばセンター駅前の広場に時々、仮面ライダーが現れるという噂を聞き込んだ。さまざまなテレビの番組や「仮面ライダー」シリーズの撮影が行われているという。番組や映画を見て、「やっぱりセンター広場だと確信した人もいるだろう。

しかし、確認はとれなかった。関係者に話を聞くと、「アクションシーンが多いため、見学者が集まって事故につながる恐れがあり、撮影場所を明らかにしない方針」のようだ。仮面ライダーを見たい人はやはり画面で、ということか。

カピオ前にて撮影準備を進めるロケ班

休日になると、多くの人でにぎわうセンター広場

噂の現場!?

学生の眼

つくばの魅力を語る

■ViCC

ViCCは、部員の住居や学内施設、大学周辺を利用して、主に大学生が主人公の映画やドラマを撮影している団体である。つくばのあちこちで撮影をしていると、今まで知らなかった魅力に気づくことが多い。学生として、実際に映画を「つくる」ViCCの代表者に話を聞いた。

つくばのロケ地としての利点は、多彩な風景と地元の協力的な点。センター周辺におしゃれなカフェが立ち並んでいると思えば、自転車で10分走ると広大な平野とのどかな田園風景が広がっている。

「いつものように撮影地を探しに出掛けると、学園都市の外れに落ち着いた雰囲気の広場と農家を見つけた。地元の人と話しているうちに、温かく受け入れられ撮影が進んだ」と代表者は語る。地元の人の協力で、映像により良い風合いが生まれた。

昔ながらの農家の風景だけでなく、そこに住む人も、普段は見られないつくばの魅力かもしれない。

■映画研究部

本学を舞台にするとどんな映画が出来るだろうか。さまざまな映画を鑑賞し、映画紹介の会誌発行も行う学生団体、映画研究部に、映画を「みる」立場からの意見を聞いた。

「シリアスな物語も、こっけいなドタバタ劇もいけるのではないか」と代表の猪熊隼人さん（国総3年）は語る。HALと最先端の研究を誇り、学内や周辺には近未来的な研究施設や建物がある本学。これらを生かし筑波が舞台のSF作品を制作してはどうか。医学を専門とする山田学長の登場もありうるかもしれない……。一方、平砂宿舎の7角形の部屋や「昔前の「北京の朝」といわれるほどの自転車の洪水、昼時の食堂の尋常でない混雑ぶりは、コメディにしてしまえるような光景だ。

総合大学である本学の学生が集結すれば、映画制作の全てを手掛けることも不可能ではない。「大学が一丸となり映画を作るとなれば話題性も強いだろう」と猪熊さん。本学ブランド化が本格始動した今、映画という手法で本学の魅力をアピールしてみては？

反射鏡

小笠原の母へ 自身の成長誓う

梅野なぎさ（社学1年）

ここ筑波大学受験当日、ジャスコのお惣菜の入ったお弁当を食べながら、私は母の言葉を思い出していた。「コンビニ弁当じゃだめなのよ。お弁当箱に入っていることが重要なのよ。」

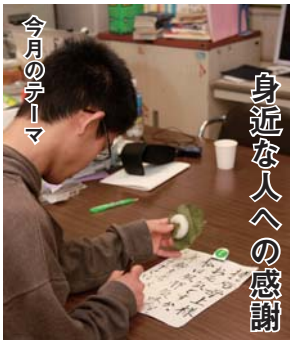
私は小笠原諸島の父島から受験に来ていた。小笠原は、東京から船で25時間。とりあえず今は、暑くて遠くて田舎だということだけは知っていてほしい。つくばとは気候も環境も違う。

そういうわけで、受験期の2月間、私は母親と都内のホテルに滞在した。そこでわかったことなのだが、私の母親はやれることはなんでもしようというタイプの人間である。受験当日、味気ないコンビニ弁当では、やる気が半減すると思い、わざわざお弁当箱を購入する。一緒に入っていたお茶は「有機お茶」という名前だった。勇気にかけているらしい。前日の昼食はもちろんお約束のカツ丼である。私が試験を受けている間は筑波山神社にハイヒールで行き、お参りしていた。たいしたおばさんである。受験後から合格発表までは大好きなお酒をやめて願掛けっぷっきり言って、うっとうしかった。これで合格出来なかったら生きてはいられないと思った。

しかし、なんとか合格することが出来、今ここにいて、充実した毎日を送ることが出来ている。だから、母には心から感謝したいと思う。次、小笠原に帰るのはいつであろう。夏休みには帰れるだろうか。そのとき母に会ったら、子離れしてもらえるよう、ひとまわり成長した自分でありたい。

毎朝の電話が背中を押す

鈴木かおる（比文1年）



先日、宮崎に住む家族から宅配便が届きました。米や洋服と一緒に入っていた家族写真は、1人暮らしを始めたばかりでまだ心細い私に元気と頑張る勇気をくれました。思い返せばこれまでの18年間、家族はいつも私を支えてくれました。

とりわけ思い出すのは朝5時過ぎに家を出て、夜9時過ぎに帰宅し、毎日3時間電車に揺られていた高校時代。家族と共に過ごす時間はそれまでと比べて激減し、特に父とは同じ家にいながら一日会わないこともよくありました。家族の輪から外れてしまった感覚になり、忙しい高校生活を負担に思ったことも、1度や2度ではありません。

しかし、遠距離通学する私を、家族は文句も言わず支えてくれたのです。1、2時間に1本しかないローカル線に乗る私のために、毎日早く起きてお弁当を作ってくれ、最寄り駅まで送り迎えしてくれた母。大雨や台風などで電車が運休になると車で迎えに来てくれた父。部活で疲れて帰ってくるのに、私が帰宅するまで夕食を食べずに待っていてくれた弟。同じ路線の人が少なく、1人で登下校し、特に父とは同じ家にいながら一日会わないこともよくありました。家族の輪から外れてしまった感覚になり、忙しい高校生活を負担に思ったことも、1度や2度ではありません。

しかし、遠距離通学する私を、家族は文句も言わず支えてくれたのです。1、2時間に1本しかないローカル線に乗る私のために、毎日早く起きてお弁当を作ってくれ、最寄り駅まで送り迎えしてくれた母。大雨や台風などで電車が運休になると車で迎えに来てくれた父。部活で疲れて帰ってくるのに、私が帰宅するまで夕食を食べずに待っていてくれた弟。同じ路線の人が少なく、1人で登下校した私にとって、温かく迎えてくれる家族が待つ我が家はほっと一息つける場所でした。わずかな家族団らんの時間でしたが、私は充実した学校生活を送りつつ、毎日その日あったことの報告会をしながら家族と温かい夕食をにぎやかに囲むことが出来ました。

1人で生活をスタートした今、すべてのことは当たり前ではなかったのだと再認識しています。高校も大学も、地元を出て自分の好きな道を思い切り進めているのは、家族の支えがあったからです。今でも、困ったことがあると以前と変わらず家族に相談します。毎朝電話から聞こえる「いってらっしゃい」の言葉に背中を押してもらっています。

離れて気付く兄弟の大切さ

宮崎裕多加（社学1年）

身近な人への感謝。この言葉を聞く両親、祖父母や先生、友人。それぞれさまざまな人の姿を捕ぇ思います。その中でつい忘れがちな感謝すべき人もいるのではないでしょうか。私の場合、それは兄です。

我が家は兄弟がそれほど良くありません。3人兄弟で私が真ん中。兄は私とも弟とも仲が良いのですが、私と弟はけんかばかりしていました。2歳とはいえ年齢差は大きく、ほとんど私が勝利を収めるのですが、弟はその後がなかなかしぶとく大抵のけんかは肉弾戦から精神的けんか（互いの悪口や嫌味）に移行し長期戦になり、兄が仕方なく仲裁に入るというのがお決まりのパターンでした。

そんな弟との関係が少し変わった出来事がありました。兄が大学に行き、一人暮らしを始めたのです。家族から離れた兄は、ぎこちなくなりながらも顔を合わせる度にお互いの学校での出来事や弟の趣味のゲームの話などをするようになりました。短い会話しかしなかった弟と長く話ことほど全く苦にならず、もっと早くいろいろ話しておけば良かったと少し後悔しました。その後もけんかは相変わらずするものの決着も早く、私が受験期の頃には勉強に気を使ってくれたりもするようになりました。

今では私も一人暮らしになり、弟は寂しい思いをしているかもしれません。むしろ、私がいなくなったことで寂しさを感じていたからです。今でも、困ったことがあると以前と変わらず家族に相談します。毎朝電話から聞こえる「いってらっしゃい」の言葉に背中を押してもらっています。

好きな道に進むサポートをしてくれる両親、自分勝手な姉を許容してくれる弟へ。いつもありがとう。今度は、私がみんなを支えられるように頑張ります。

次号のテーマは
私のIMAGINE THE FUTURE です

連絡先
TEL 029・853・6699
e-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

筑波時評

無縁社会 「縁」は私たちを守るが 他者との出会い妨げる

五十嵐 沙千子

「無縁社会、困ったもんだ」と言う。核家族化で世代間は断絶、都会志向で地縁も薄れ、終身雇用崩壊で会社への帰属意識も薄れる、いろんな古い共同体が求心力を失って、終にオタク的なバラバラの孤立した冷たい社会になってきたというわけである。

確かに「有縁社会」は暖かい。困っていれば助け合える。ちゃんと共同体があって私たちはその一員なんだって安心できるし、「俺ら」って言えるし、こういう時どうすればいいかも全部わかってるし、居場所があるっていうのは多分いいもんなんだろう、と思う。でも、不思議とこういう有縁社会の中に私の居場所は無かった。

クラス対抗リレーの意味もわからないアンカーだった私には、「みんなで燃える」のも、「あの人たち」（クラス、学校etc.）ってこうよね、ああよね」も、「あたしたちはこうだよね」って言うのもよくわからなくて、「でもあたしは違うんだけど」って内心思ってしまうのだった。内心だったのは、もちろん声に出すと「縁」の「外」に出されちゃうのがわかっていたからだ。「みんなで」って「怖い」なぁって、今でも私はちょっと思っている。だから、ちょっとドイツに行ったときも「日本人同士だから」一緒にいようよ～っていうのは「なんかうざい」と思っていつい足が遠のいてしまうのだった。

そうだ。ドイツが、私にとっては「無縁社会」だったのだ。知っている人は誰もいないし、故郷を遠く離れて地縁も血縁も無い、言葉も通じない、しかも「日本人でツルもうぜ」も離れてしまったら、もう私には何の「縁」も残っていなかった。「俺らも」みんなもなくて、誰も私には「私たち」って言ってくれないし、「普通みんなさ～」の「中」にも入ってくれないし、そういう風な前提を持って接してくる人もいなかった。

「みんな」でいないと「すること」もない、っていうのは発見だった。「みんな」でいるから、これしよう、あれしよう、じゃあ明日は何時に!、みたいなのがあるんだけど、「縁」がないと何にもない。確保された人間関係もないし「なぁなぁ」でなんとなく「わーわー」時間を過ごすことも出来なかった。頼る人もいないから、風邪引いたらどうしよう、みたいな感じもあった。

でもそれはとても私には気持ちよかった。スースーして寒かったけど、ドイツには、やっぱり私みたいに「無縁者」がいて、そういう「無縁者」は、「俺らさぁ～」とか「普通みんなさぁ～」っていう語り口を持っていないから、「あなた誰？」「おまえ何？」って、直に向き合ってくる。「んん？」って最初は引いちゃうんだけどでも私はね～で、あなたは」ってやっていくと、そうするみたいな、そういう「知合い方」っていうか「出会い方」だった。ドイツ人もポーランド人もいろんな人がいたけど、何人、っていうのは全然関係ない、ただ私にとっては永遠に「ミハウ」とか「カール」でしかない、その前では私も日本人でもなくどこそ大学の誰ちゃ、その人と知り合うことが出来るようになってくる。それは、「みんなさぁ～」なんと言っていた時の「知合い方」（すぐ「あたしたちさぁ、普通さぁ～」に回収しちゃうような）とは全然違って、私にとって特別な、その人が「みんな」の地平から屹立（きつりつ）とかでも誰々サンチの何とかでもない女でさえないいただの「サチコ」だったのだ。

「無縁社会」の中で、すべての私を取り囲み守ってくれる暖かい「縁」の外側の寒いところで、私はミハウたちと出会うことが出来た。そこで、私はサチコでいることが出来た。そういあり方をすることが出来た。その人がいるからドイツもポーランドも私の故郷だって思えるような、同時に限りなく「私は日本人だから」っていう意識が胡散臭くなって薄れていってしまうような、いや、私は「私」であっていいのだ、私のままで、あなたと出会うことが出来るのだ、と私にわからせてくれた。そういう「あなた」との出会いは、そこで可能だったのだ。

「縁」は私たちを守ってくれる。だが、それは私をあなたから、そして私自身から遠ざけてしまうものでもある。

「無縁社会」、怖くないよ。そこで、ナマ温かい「古巣」から出てきたあなたはいつもきっと、あなたと、そして別のあなたと、出会うことが出来るのだ。（哲思・准教授）

留学生の目

ニック・ワン

こんにちは、マレーシアから来ました、ニックと申します。この春、筑波の研究生になり、来日5年目に入ります。皆さんは筑波を田舎と思うかもしれません。けれど、僕にとっては、そんな事ないよ！

僕の出身大学の大分県別府にある立命館アジア太平洋大学（APU）はもっと田舎だよ！山の上にある大学、一番近いコンビニは車で30分！それこそ田舎だ！でも景色は最高だよ、100万ドルの別府湾。夜景を眺められ、自然が豊かな暮らしとも2000人ぐらいかな？留学生と触れ合うチャンスが多い場所ですね。でもさ、僕は壁を感じてた。それは日本人留学生の壁。たぶん言語の壁もあるかもしれないが、心理的な壁もあるかな？外人って、怖い？

日本には「十人十色」という言葉があるでしょう？僕は「留学生2000人2000種類の色」と思うよ。皆は共通点は国際的な感じで、留学生が多い！両方やすいところです。皆さん是非一度別府の温泉巡りの後は、APUに来て眺めてください。

筑波とAPUの大きな共通点は国際的な感じで、留学生が多い！両方

2000人 2000種類の色

つけた！それはラテン民族の情熱特性の秘密であり、言葉と心理的な壁を越え、2000種の色がよく混ざるものそれは、メキシコの特産・テキーラ！塩とレモンでショットだけ！世界の人々となじみになる訳だ！

中南米のペルー、ブラジル、メキシコ、ヨーロッパのスペイン、ボスニアから来た6人と一ノ矢宿舎で「外JinFashionTVsalsaDrinkingClub」という非公式サークルを立ち上げた！アジア代表の僕はテキーラの力を借りて、言語の壁を乗り越え、Salsaを踊る！読者の皆さんも興味があったら、FacebookでこのグループをTRYしてみたら？外人はオモシロいよ！（システム・研究生・マレーシア）

第18回天上大風
和の文化を見て、触れる

日ごろの活動成果を披露
会場一体となり締めくくる

本学芸術系サークル連合会が主催し、伝統文化系の団体が集まり日ごろの活動成果を披露するイベント「天上大風」が先月24日、開学記念館で行われた。18回目を迎えた今回は「薫風満帆」をテーマとし、ときめき太鼓塾や邦楽部など6つの団体が実演や発表を行った。

体験コーナーで津軽三味線の弾き方を教わる来場者

「津軽三味線倶楽部無弦塾」のパフォーマンスでは、「アカバナー」や「鬨（かちどき）」など6曲が披露された。6曲目の「大祭」では、激しく男らしいパフォーマンスが多く披露され、観客から何度も大きな拍手が沸き起こった。

ステージ発表と並行して行われた歌留多部の実演では、部員による競技かるたの模範試合が行われ、目にもとまらぬスピードで行われるかるたの取り合いに驚く来場者の姿が見られた。

休憩時間に開かれた体験コーナーでは、多くの人が和楽器や和の文化に触れ、参加者から指導を受けて楽しんだ。東京の大学から来た橋本勇樹さんは、「演武を流武道を体験し、見るのと実際にやってみるのとは全然違った。武具は重かったが、教わったように振るとイメージ通りに動かすことが出来た」と語った。

フィナーレでは恒例のコラボレーションでの演奏が披露され、今回は松任谷由実の「春よ来い」のアレンジで会場が一体となった。

実行委員長で歌留多部の森はるかさん（社学2年）は「成功したのは参加者や来場者の皆さんのおかげ。これからも伝統文化をもっと見て知ってもらいたい」と話した。

Dance Express vol.4

地域の人々に向け発表
学内外の6団体舞う

本学ダンス部が主催したDance Expressvol・4が今月1日つくばカピオホール（つくば市竹園）で開かれた。この催しは、地域の人につくばのダンスを知ってもらうという目的で3年前から開かれている。公演にはREAL JAMや舞踏研究会などの本学のダンスサークルの他に、中高生で組織されたDlmatesなど、計6団体が参加した。

公演ではそれぞれの個性を活かしたパフォーマンスが繰り広げられた。ダンス部の「Moulin Rouge」では、演技者が音楽に合わせた軽快なステップを披露し、来場者はその動きに見入っていた。また、舞踏研究会が行った「ultra soul!!」では、激しく情熱的な踊りに、会場からは掛け声や拍手が起こった。

公演を見に来た山口大貴さん（CS1年）は「踊るのは個々人だが、全体で調和のとれた1つの舞台となっていて、すごいと思った」と話した。

また、今回の公演を主催したダンス部の部長である嶋田絵理奈さん（体専4年）は「アットホーム会場で、観客が近くに感じられ、自分たちも楽しく踊ることが出来た。今後は参加団体をつくば市以外にも広げていきたい」と語った。

アートギャラリー

「青イヌと黒リス」など作品展示
招待状の配布も

青野広夢さん（芸専2年）と黒上涼子さん（同）の展覧会「青イヌと黒リス」が本学アートギャラリーT+（ティータス）で先月19―23日に開かれた。

イヌに似ているという青野さんとリスに似ているという黒上さん。2人がそれぞれ同じテーマで描いた「青イヌと黒リス」をはじめとした油画など11点が展示された。黒上さんは手芸用のレースを取り入れた作品など4点、青野さんは柔らかなタッチの油絵7点を展示。中には、はがきサイズの作品もあり、目を凝らして眺める来場者が多く見られた。

手の込んだ作品に見入る来場者

また、会場前では「動物たちの声が聞こえますか？」と書かれたはがき型の招待状が配布されており、立ち止まって手に取る通行人の姿がみられた。

展覧会に訪れた田中里奈さん（人文1年）は「学群生とは思えないほど完成された作品で、思わず見入ってしまった」と語った。

体育ギャラリー

さまざまな球の歴史や工夫展示

本学体育ギャラリーの第3回企画展である、東京高等師範学校と体操伝習所創設130周年記念展「球～ボールから見るスポーツ～展」が、昨年11月20日から8月31日まで開催されている。体育ギャラリーは、本学の体育の原点である体操伝習所の創設130年を記念して、5C棟内に2年前に開設されたもの。

この企画展では、スポーツで用いられるさまざまなボールの構造や歴史を知ることが出来る。壁には解体され中身が見えるようになっているボールが展示され、そのボールの素材や形、生産国に関する情報や製造上の工夫、裏話などが書かれている。また、天井からはさまざまなボールが吊り下げられており、通りかかる人の目をひく。

企画展に訪れた松本咲穂さん（人文1年）は、「何気なく使われているボールだが、選手たちが快適にプレーするための工夫がたくさん施されていることがわかり面白い」と語った。

原点 GEN-TEN

植物への好奇心尽きず
恩師の言葉胸に現研究へ

原点は自分では覚えが無い。気がつくと花鳥虫と呼ばれていた。幼稚園からの帰り道では虫を追いかけて寄り道ばかり、まっすぐ帰ったことは無かったそうだ。きっかけは両親が与えた昆虫図鑑であったのかもしれない。以下、原点と呼べそうなものを中心に、筑波大学で研究室に入るまでの出来事を並べてみた。

「こんなに広いところで10年に1品種？」小学校の卒業旅行として、実家の名古屋から広島まで一人旅をした道中に岡山の叔父を訪れ、農業試験場の圃場（ほじょう）を見学した際の感想である。「ポマトの失敗を乗り越えよう」。高校生の時、細胞融合という最先端技術の結果が報道された。

小野 道之

幼少の頃に遊んでもらった叔父は、ムギの品種改良の専門家になっていた。あまりの広さに私は、もっと効率が良い品種改良が出来るのではと考えた。その後、実家の庭で草花の交配実験を始めた。青色や黄色の花を咲かせる椿を夢見て珍しい木を取り寄せた。今春も拙庭にその名残が咲く。愛読書はルーサー・バーバンクの「植物の育成」であった。

「ポマトの失敗を乗り越えよう」。高校生の時、細胞融合という最先端技術の結果が報道された。ポテト（じゃがいも）とトマトの交配はできない。そこで、プロトプラスト（細胞壁を取り除いた細胞）の融合による、細胞融合雑種が作られた。地上部にトマトが成り、地下部にはジャガイモが出来、寒さに強い性質や病気に強い性質なども両親の良いとこ取りが期待された。しかし結果は無惨なもの、葉の形はぐちゃぐちゃ、果実もイモもできず、虚弱だった。

人類が植物に関して知っていたことはわずか。植物を中身が解らないブラックボックスに例えると、ブラックボックス同士を強引に混ぜただけでは、完璧な調和が崩れてしまう。シンプルに確実に、ある特定の性質だけを加えることが必要だろう。これは現在の言葉であらわせば、ある性質に関係した遺伝子だけを加えるという遺伝子組換え技術になる。新しい技術を開発するため、遠回りでも大学では生物学を基礎から学ぼうと考えた。筑波大学は植物学の教官が充実していると聞いたから、父が勧めた「全国大学職員録」を県立図書館で調べて知った。

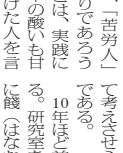
「君には植物の発生と分化に興味を持ってもらいたい。大学2年生の秋、あこがれの先生の研究室を訪ねた際、つくばのオレンジ色に輝く夕日を背景に、恩師は静かに情熱を込めて語られた。先生は生物学類の教官であったが農学のご出身、園芸にも通じていて、その話には深く共感した。あの夕日の輝きは忘れられない。

●●●●●●●●●●

おの・みちゆき

1960年生まれ。生命環境科学研究科准教授。筑波大学生命環境学群生物学類卒業。同大学院博士課程生物科学研究科中退。信州大学繊維学部応用生物科学科助手、秋田県立生物工学研究所、秋田県立大学生物資源科学部助教授を経て、2001年より現職。専門は植物発生工学など。

未来を担う若者へ
青年の思索のために


大森 肇

「青年の思索のために」に出会ったのは、40年前のことである。中学の一年を終えようとしていた私に、担任の仁木美智子先生が下さったのだ。本書は下村湖人が1955年に出版した名著である。私はこの書を座右に置き続け、幾度となく読み返したものである。5回や10回ではない。数十回以上という表現が一番的を射るだろう。セピア色という言葉がこれ程ふさわしい書物もあるまい。数えきれないほどに書き込みを入れた頁は、まるでわら半紙のようである。

湖人は人間をあくまで肯定的に捉えているそれは、人間には法律を破るような性質が本来備わっていることを見据えた上で、なお「心の至深所にはいつも清らかな泉がわいている。これは愛と知と勇気とが透明にとけあった泉である。これを疑うものはまだ一度も自分の心を本気でほり下げて見たことのない人である」と表現される。彼はピア色という言葉がこれ程ふさわしい書物もあるまい。数えきれないほどに書き込みを入れた頁は、まるでわら半紙のようである。

湖人は人間をあくまで肯定的に捉えているそれは、人間には法律を破るような性質が本来備わっていることを見据えた上で、なお「心の至深所にはいつも清らかな泉がわいている。これは愛と知と勇気とが透明にとけあった泉である。これを疑うものはまだ一度も自分の心を本気でほり下げて見たことのない人である。

下村湖人著

また、個の発展と全体の調和をいかに融合させていくかに視点を置く。「生きるということは、自分の存在を「まかり間違えば、損得の問題や、理屈の言いあいで、揚げあいにもなりかねないところを、きわめてなごやかに取りさばいて行くものである。こんな力がどこから出て来るかというと、（中略）生きた世間にもまれて、みっちり『苦労』をしたあげく、いわゆる禅機とでもいうようなものを捉えているためではないか」と湖人は説く。「苦労」の持つ意味を、改めて考えさせられるこの頃である。

10年ほど前のことである。研究室を巣立つ学生に餞（はなむけ）として贈ろうと書店に赴くが、既に絶版で手に入らないとの状況は少しずつ変わり、インターネットを介して、古書なら手に入ることが分かった。そしてついに昨秋、「（新装版）青年の思索のために」が刊行された。人も物も環境も、ともすれば歪んでいく時代である。その事に人は気付き始めたのであろうか、原点回帰の気運が芽生えつつある。良い物は良い、美しい物は美しい。素直な感性に基づく平衡感覚が今改めて問われている。未来を担う若者に期待したい。（PHP研究所・840円）

（体育・准教授）

自分の身は自分で守れ！

まずは危険を知ることから

新年度が始まり早1カ月。新しい環境にも少し慣れてきたこの時期に、危機意識について考えてみよう。性、酒、心、宗教勧誘、自転車という、本学生とは切っても切り離せない5つの観点からアプローチする。（本紙・野口尚喜、雪丸千彩子＝人文学類、牛尾仁実＝社会学類、根津彩香＝国際総合学類、森田聡＝社会工学類）

性

人を好きになり、一緒に過ごしているうちに、相手に触れたくなるのは、人としてごく自然な感情。ただ社会的に自立していない学生には、責任ある性行動が必要とされる。

実際問題、性や生殖、妊娠・出産、育児に関する正しい知識や情報が私たちに与えられているかと言えば、そうではない。世の中では、望まない妊娠の結果生まれた子供が殺されるという痛ましい事件が後を絶たない。その一方で、子どもに恵まれず、不妊症に悩む夫婦もいる。

本学には、学生が性や生殖について知る一助となる講義が用意されている。総合科目Aで開設されている「性と生殖の看護学」だ。講義の根底にあるのは「生命について考えること」。講義は生殖器の構造などの生物学的な内容から始まり、男女の性行動、性感染症、避妊法、妊娠・出産、育児までを追う。また、近年その倫理観が問題となっている、代理出産やクローン技術、ドナーにするために子どもをつくることなどについても取り上げる。

講義中は性に関する用語が多く聞かれる。学生の中には、そのような言葉を聞いて恥ずかしそうにする人もいるという。しかしこれらの内容は、私たちが遅かれ早かれ直面する切実な問題だ。講義を担当する江守陽子教授（看護専攻）は「性に対する個人の意識は、これまでの育ちが関係してくるので、すぐに変えられるものではない。しかし恥ずかしがらずに前向きに関わってほしい」と話す。

学生には手軽で、性感染症も防げるコンドームを用いた避妊を推奨する。使用法は説明書に記載があるので、必ず読むべきだ。コンドームによる避妊率が100％ではないのは、正しい使い方でコンドームが破れたり、ずれたりすることなどが原因である。

責任ある性行動を

また、性感染症の広まりが世界的に問題となっている。性感染症とは、性行為または性行為に類似する行為によって感染する疾患の総称。古くは江戸の遊郭でも梅毒などの性病が恐れられてきた。現代の性感染症の恐ろしさは、自覚症状がほとんどないことにある。

特に若い女性に多いのが、クラミジア感染症だ。クラミジア・トラコマティスというウイルスが原因で感染する。ウイルスが目に入れば結膜炎を引き起こし、肺に入れば肺炎になる。軽いカゼのような症状で、妊婦検診で見つかることが多い。感染が子宮や卵管に広がると不妊の原因になり、流産や早産などの異常分娩につながる。新生児にも産道を介して、感染する危険性がある。

その時だけではなく、今後の人生にまで影響を及ぼしかねない性感染症。しかし、大概の性感染症は抗生物質の投与で治癒する。大切なのは、体に異常を感じたら専門の病院を受診することだ。

「14才の母」というセンセーショナルなタイトルのドラマが話題になったのは数年前。世間では性体験の低年齢化が問題視されている。しかし大学生ともなれば、親になるための準備期間として、性に対する正しい知識や考え方を身につけておく必要がある。あいまいな知識で責任ある性行動がとれるのか。これを機に、今一度、考えてみてほしい。（雪丸）

【近年増加している性感染症の症状】

＊クラミジア感染症

潜伏期間は1～4週

男性　汁状の分泌物で下着にシミがつく。
　　尿道のかゆみ、違和感などの排尿障害

女性　濃い黄色や黄緑のおりもの

＊性器ヘルペス

感染して2週間くらいから米粒大の水疱がでる。
激しい痛みがある。

＊トリコモナス

男性　排尿痛、分泌物の増加

女性　悪臭のある淡黄色のおりものが増える。
　　外陰部のかゆみ、発赤して熱をもつ。

※性感染症の検査対象となる自覚症状には、他にも不正出血、下腹痛、性交痛、頻尿などがある。

心

「夜、眠りにつきづらい」「以前より食欲が落ちた」「悲しいのに泣けない」「急に涙が出てくる」「朝起きてもやる気が起きない」。特に5、6月や夏休み明けは、年末にこのような症状を訴える人が少なくない。これは、メンタルヘルスに何らかの問題が起こり、身体症状として現れている可能性がある。そのような場合には、家族や友人など身近な人に相談することが大切だ。それでも改善しなければ保健管理センターに足を運んでみよう。同センターで常勤カウンセラーを務める佐藤純講師（ケア）に話を聞いた。

同センター1階の学生相談室には、臨床心理士の資格を持つ男性職員2名、女性職員5名が交代で学生のカウンセリングを行っている。相談は原則予約制で、電話での相談も受け付けている。「相談する人にとっての最適な方法を一緒に考えていく」、これが学生相談室のスタンスだ。

昨年度の学生相談室における相談件数は延べ2760件。相談内容は季節によってさまざま。例えば年度末には、進級に関する相談や、課題に対するやる気が出ないという相談が多い。「就職活動や卒業研究が始まった4年生以上の相談が多いという印象だ」と佐藤講師は話す。

抱え込まずに相談

相談内容は、学業の悩みや人間関係での悩みなど理由が明確なものばかりではない。漠然とした不安から精神が衰弱し、夜眠れずに更にストレスを感じるという悪循環にある場合、解決に至るまでの道のりは平たんではない。相談する人とカウンセラーの双方が、問題について焦らずゆっくりと考えることが必要だ。

同センターにある精神科とは、相互に協力している。メンタルヘルスのケアが必要な場合には、精神科の受診を勧めている。逆に、精神科を受診した後に「改めてゆっくり話を聞いてもらいたい」と学生相談室に来る場合もあるという。このように、精神科と学生相談室は連携しつつ、相談者にとっての最適な方法を模索している。

同センターのほかにも、本学にはスチューデント・プラザ3階の学生主支援室内に総合相談窓口が設置されており、専門のカウンセラーが相談に応じている。開設時間は月、火、木、金曜日の13時30分―17時15分で、1回の相談は最大30分まで。同センターと異なり予約制ではない。電話相談も可能だ。

自分の身の回りで危険信号を出している人はいないだろうか。そのような人を放っておいてはいけない。異変に気づいたら本人から話を聞いてみよう。本人も一人で悩む必要はない。身の回りに手を差し伸べてくれる人がいる。そう考えるだけでも、心が軽くなるはずだ。（根津）

酒

大学生になると、誰もが参加する飲みの席。大学に入ると、新歓イベントと称して新入生も飲みの席に招かれる。新入生の多くは未成年だが、お酒を勧められる。未成年飲酒は違法行為であり、その横行自体が問題だ。

成人であっても、急性アルコール中毒になることもある。Aさんは急性アルコール中毒で意識を失い、病院に運ばれた。目が覚めると、看護師に「もう大人だから、二度とお酒を飲み過ぎないと約束してほしい」と言われた。死に至ることもある危険な中毒状態のため、看護師はそう言ったのだろう。急性アルコール中毒について、水谷太郎教授（疾医）に聞いた。

急性アルコール中毒は、どのように起こるのか。短時間で大量のアルコールを摂取すると、脳に異常を来たし、体が言うことをきかなくなる。初めは少し物が見えにくくなり、話しかけても反応がやや鈍くなる程度。進行すると意識を失い、最悪の場合死に至る。「呼吸や様子がおかしい人がいた場合、すぐに救急車を呼ぶことと水谷教授は言う。救急車が来るまでも窒息を防ぐため、回復体位（下図参照）を取らせる。

では、どれだけアルコールを摂取すれば急性アルコール中毒になるのか。実は具体的な量はなく、「個人差が大きい。体調にも影響される」と水谷教授は言う。また、「お酒に強い言い」という体質は、急性アルコール中毒とはあまり関係がない。誰でも急性アルコール中毒になる可能性がある。「自分はお酒に強いとの過信は絶対禁物」と水谷教授は警鐘を鳴らす。

短時間に大量のアルコールを摂取すれば、一気飲みをさせたことがある。Bさんは「飲み会でみんな酔っているのにその中でどちらも、場の「空気」を読めず一気飲みをさせるのか。なぜ根強い。そもそも、なぜ無理やり飲ませる風潮は未だに根強い。そもそも、なぜ一気飲みをさせるのか。Cさんは「とりあえずその場がもつから」と思い、一気飲みをさせたことがある。

KY恐れず断る勇気

「空気」を読めず、その「空気」に順応する。飲み会にかわらず、最近の若者が得意とする行為だ。

ただ、一気飲みの恐ろしさを、実際は多くの人が認識している。「認識」と「空気」、どちらを優先するのか。そうそう正しい選択をすべきではないか。「お酒が飲める年齢」とは、「正しい選択が出来る年齢」を指していると思う。「空気」を読めるだけでは、「大人」になれない。（牛尾）

宗教勧誘

ある日、私が友人のアパートを訪れ、話をしていたときのこと。突然インターホンが鳴った。友人はドアを開けたまま、なかなか戻ってこない。立ち話をしているようだ。しばらくして、その友人は部屋に戻るなりこう言った。「サークルの勧誘みたいで、興味があるから連絡先を教えようと思って……」。怪しいと思った私は、メモ帳に自分のフリーメールアドレスを書き、それを玄関で待ったときのこと。「それはカルト宗教ですね」ときっぱり。これを聞いた先ほどの友人は「筑波には大学非公認でもまじめに活動しているサークルがあるから、それが普通のサークルかどうか分かりづらい」と話した。この答えが、本学生をとりまく環境を的確に表している。

私たちの周りには、宗教団体が数多く存在する。その中には、宗教であることを隠し、サークルや勉強会を装って勧誘する団体もある。

以前から、そのような団体がサークルや勉強会、イベントを装って勧誘することが知られていたが、近年人に渡すよう言った。玄関にいたのは、本学の学生2人だったという。

学生生活課に問い合わせると「それはカルト宗教ですね」ときっぱり。これを聞いた先ほどの友人は「筑波には大学非公認でもまじめに活動しているサークル

時には「疑う心」持って

のTACTフォーラムや学生生活課などで、公式なものかどうかを確認するのが望ましい。

また、説明会などで「先輩の部屋」などに連れて行こうとする場合は要注意だ。冒頭の団体もこのような内容のメールを送ってきた。宗教団体の中には、マ

窒息を防ぐ回復体位

ではSNSのコミュニティを利用した手口もあり、その方法は多様化している。

しかし、変化しない部分も多い。まずは、「課外活動団体紹介誌」に名前のない、大学非公認のサークルであること。しかし、TACTを装う手口も報告されているので、1D棟3階のTACTフォーラムや学生生活課などで、公式なものかどうかを確認するのが望ましい。

また、説明会などで「先輩の部屋」などに連れて行こうとする場合は要注意だ。冒頭の団体もこのような内容のメールを送ってきた。宗教団体の中には、マインションの一室を持ち、そこで洗脳されてしまうことがある。活動中に、携帯電話の使用の制限を受ける、プライバシーが守られない、などの情報規制を受けたらそれも危険性が高い。洗脳に時間をかけるカルト的教団は、その途中で誰かに団体の正体を見破られることを恐れる。そのため、親にはまだ言わないように、と口止めする。同じ理由で、友達を連れて来ることについて、快く思わないようだ。

これまでは、個人の信仰の自由を尊重するという観点から、問題のある勧誘に対応しにくい事実があった。しかし、その団体の正体を隠すなど、私たちの自由な意思決定を阻害している点で大きな問題がある。また、学内では特定の政党や宗教のための活動を行ってはならないし、またそれを目的とした集会を開いてはいけない。

いずれにせよ、大切なのは「疑う心を持つこと」だ。全国から学生が集まり、その多くが一人暮らしをする本学では、自由をつかんだばかりの新入生の心の隙を狙い、さまざまな手法で勧誘が行われる。社会に出るには「疑う心」が必要だということを、肝に銘じてほしい。少しでも「おかしい」と感じたら、その活動への参加を断り、スチューデントプラザやクラス担任などに相談しよう。（森田）

筑波大生の生活に喝

自転車

大学構内を移動する際、多くの学生が利用している自転車。しかし、危険な運転や違法行為など、大学側から度々注意もなされている。ここでは、それらが「なぜ」いけないことなのか、「何が」危ないのか、学生向けに呼び掛けを行っている学生生活課に話を聞いた。

①無灯火運転

無灯火運転をすることで最も心配される点は、自転車が周りから見えにくくなるということだ。ライトは運転する自分の前を見やすくするためだけというのは大きな間違いである。

ライトは車体の前方数メートルを照らすことが出来る。カーブや見通しの悪い交差点を渡る際、自転車に明かりがあるかないかでドライバーの発見のタイミングが大きく変わる。このように、自分の存在を相手に知らせることが、自転車のライトを点灯させる大きな理由である。周りの人間の視点に立って、ライトをつける習慣が必要だ。

②「ながら」運転

ケータイの画面を見ながら運転する、これが危ないのは言うまでもない。また、電話をしたり音楽を聞いたりしながらの運転も、危険への注意力、回避力を下げることになり危険である。

交差点を横断中、後方から来る左折車との接触事故、細い脇道からの出会い頭など、視覚だけでは気付かない危険はある。見えないところから自分の近くに車が来ていることを、聴覚によって察知し、ブレーキに手を掛けることも必要だ。もろい事故を避けるためには、視覚と聴覚どちらが欠けてもいけないのである。

③飲酒運転

飲酒による思考のマヒや運動能力の低下は、自分に跳ね返ってくる。暗い所を注意して通ろうという意識がなくなることで、危険度が低い所でも事故に遭う。転倒や衝突だけでなく、過去には工事現場の側溝に落ちて大けがを負うといった例もある。

高い意識で事故防止

車道をきっそうと走るロードバイク。一般的な自転車よりも危なっかしく見えるが、ロードバイクの運転者が事故に遭ったり怪我をしたりするケースは、自転車に比べて少ないという。その理由として、ライト・ヘルメット・反射板の装備が徹底されていることと、それらを守り「安全に走ろう」という意識が高いことが挙げられる。

しかし、本学生の誰もが高い意識を持っているわけではない。前方の信号が赤であるにも関わらず、交差する側の信号が赤だからといって横断歩道を渡ってしまう学生がいる。信号が赤になっても、交差点に残っている車が横断歩道に向かって右折してくることが多い。信号無視がどれ程危険な行為か、理解していない学生もいるのが現状だ。

無灯火、音楽、ケータイ、飲酒に至るまで、ルールを無視するという意識の低さが、危険を呼び込んでいる。

もちろん刑事上の罰もある。近年、日本では飲酒運転の厳罰化が進んでいる。自転車は軽車両、れっきとした車である。検挙されなければ大丈夫、などという甘い考えではいけない。

◇

「～してはダメ」という呼びかけをただ聞くだけではなく、何が危ないのか、危険を回避するにはどうすればいいのかを意識してみてはどうだろう。ルールを守るということは、事故を未然に防ぐことであると同時に、危険への意識を高めることでもある。（野口）

点灯するかしないかで、自転車の見つけやすさが大きく異なる。（左：サイドミラーに映る自転車、右：正面から見る自転車、車内から撮影）

■訂正とお詫び

本紙284号13面掲載の英語教育改革の図で、1年次必修科目の単位数を、0・5単位と掲載しましたが、正しくは1・5単位の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

視点

生活の管理も勉強

本学生の多くが親元を離れ、一人暮らしをしている。自宅通学の学生も、入学前に比べ、自宅で家族と過ごす時間は減ったのではないだろうか。大学生になると、良く言えば「自由」を手に入れる。悪く言えば保護者不在の「野放し」状態になる。

入学前は、両親や寮の職員などにより、生活があれていたのだ。しかし管理の目がない今、自分の身は自分で守るしかない。生活における危機意識を自分で持たなくてはならない。

しかし、実際の生活はどうだろう。門限がないため、遅くまで飲み歩き、酔いつぶれる人もいるだろう。また、寝坊したため、信号無視を視をして自転車をとばして登校した経験は誰しもあるのではないか。あるいは、大金を巻き上げられる、宗教勧誘まがいの詐欺の危険性について、どれだけ意識しているだろうか。

これまで管理された環境で生活していたわたしたちは、いわば、危機意識の高い大人たちに私たちは守られていたのだ。しかし管理にとって、危機意識を持って自分で生活を管理するのは容易ではない。しかし、今管理出来なければ、社会人になっても管理出来ないままだろう。おそらく社会人の方が大学生より忙しい。その忙しさの中で生活を組み立てなければ、自立出来ない。その練習を、少し時間に余裕がある大学時代にしてはどうか。

大学生が勉強すべきことは、机上にあるものだけではないと思う。遊びも勉強、生活管理も勉強だ。常に危機意識を持ちつつ、「自由な時間を満喫し、一人暮らしでも生活出来る訓練をしなくてはならない。（牛尾）

HELLO! 先端科学

高齢者の誤服薬を防ぐ

少子高齢化社会支える

iMec System

高齢者は、薬の飲み間違いや飲み重ねなどの誤服薬を起こしやすい。一人暮らしの高齢者が増加する中、日本の服用不遵守率（用法・用量を守らず飲んでしまう割合）は34%で、中国に次いで世界で2番目に多い。

こうした現状を受け、中内靖准教授（知機）らの研究室では、鈴木拓央さん（知機3年）が中心となって、単独居住者の服薬状態（服用時間・用法・用量など）を確認し、本人ならびに介護者や家族へ知らせるシステムを開発した。

高齢者の場合、たった一度の誤服薬が原因で、寝たきりになってしまうケースさえある。介護者は、一人暮らしの高齢者の服薬状態を定期的に確認する必要があるが、度重なる訪問は介護者にとって大きな負担にもなる。今回開発されたシステムは、高齢者の服用状態を把握し、誤服薬を注意することで服薬事故を防ぐだけでなく、介護者の負担を減らすことにもなる。

このシステムは「iMec System」と呼ばれる。一見すると黒い箱であるが、コンピュータを内蔵しており、タッチパネル式の画面やスピーカー、マス目状に区切られた薬ケース、それを下から撮影するカメラなどが一体となっている。

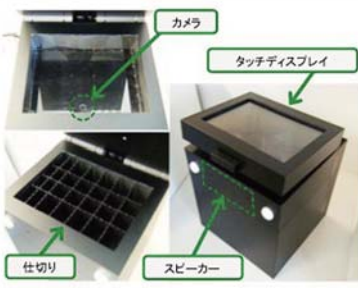
処方された薬を、あらかじめ曜日や服用時間で区切られた薬ケースに入れておく。そして、薬を飲む時間になると、服用者が導くに居る場合は本体が光って注意を向けさせる。近くに来ると画面に飲むべき薬の種類、用法・用量などを表示し、服薬を促す音声を流す。薬が取り出されたびに、内臓されたカメラがLEDで照らし出されたケース内を撮影し、コンピュータが確認するため、誤った薬を取り出したり、飲み忘れたりすると、警告の音声が流れるようになっている。

介護者や家族は、携帯電話やパソコンから専用のサーバーにアクセスすることで、遠隔地からでも服薬状態を確認することが出来る。誤った服薬や、飲み忘れがあった際には、システムから警告が発せられると同時に、介護者や家族に電子メールが送信される。

服薬のタイミングは、ユビキタスセンサから算出される。ユビキタスセンサとは、台所や寝室、廊下など、生活のあらゆる場面に仕掛けられたセンサのことだ。これを用いて服用者の生活パターンを認識し、服薬のタイミングを察知する。しかし、一般の家庭にユビキタスセンサを導入することは困難であるため、システムの製品化に当たっては、あらかじめ時間設定をしておくという方法をとる考えだ。

製品化には、2、3年程度かかる見通しだ。今夏には、訪問サービスを行っている調剤薬局と協力し、一般家庭へ5台程度試験導入する実験を行う予定だ。今後は、コストの引き下げを試みるとともに、まずは福祉施設や介護施設などの事業者に導入を呼びかける。その後、一般家庭への普及を目指す。

少子高齢化が進む現代。このシステムの実用化は、高齢者と介護者双方が、負担なく安全に暮らせる未来への大きな一歩となるだろう。（本紙・堀木陽子＝人文学類）



iMec System の構造

卒業生からの手紙

有限会社つくばインキュベーションラボ 代表取締役

島袋典子さん

産業と地域をつなぐ

つくばインキュベーションラボを創業してちょうど10年目になりました。たまたまつくばに戻って夫の仕事を手伝ったことがきっかけでしたが、私なりにこの街に必要だと思ったことを仕事として認めていただけた結果でしょうか。

私の名刺には「代表取締役」と「コーディネータ」を併記しています。前者は会社の代表としての役割を表し、後者は業務上の役割として使っています。コーディネータは、複数の人や組織が連携して活動するためのつなぎ役として多くの方にお会いすることもちろん、そのプロジェクトや事業に適切な情報等を提供して、仕組み自体を調整していくことにも関わります。また、新たな出会いを作っていくための広報企画や広報物の制作も行い、自分で文章を書くこともあります。

私は筑波大学社会工学類の一期生です。大学のみならず筑波研究学園都市全体が建設中だったので、巨大な建設現場の中に住んでいるようでした。生活利便施設はあまりなく不便でしたが、新しい街ができつつあるという期待感はありました。学類の授業では「社会に代案を提示するために」と事あるごとに言われました。私は都市・地域計画を専攻しましたが、実際に土浦市を対象とした都市計画実習や、3年時の夏休みに課せられた企業実習は、当時としてはたいへん意欲的な試みで、今も続けられているようですね。

私が会社を作った動機は、産業とまちづくりが調和したイキイキとしたつくばになるために、産業側のプレイヤーがもっと必要で、一方でもっとこの地域にある資源や魅力を活用しようと考えたからです。そこで、新しく会社やプロジェクトを始める場「インキュベーター」を用意して入居者を募集し、必要なお手伝いをするという事業を始めました。しかし私自身はそれまで、会社を作ったり経営者になることなどを考えたことはありませんでした。考えたことをやってみるには、ちょうど受け皿となる組織が存在しなかったので、自ら作るという選択になった訳です。会社を作ったからといって、仕事がすぐに転がり込んでくるわけではありません。インキュベーター事業だけでなく、いただいた機会に提案をしたり、依頼された調査の仕事などを続けながら、少しずつ出来ることを増やしています。

（昭和56年度、社会工学類卒業）

スポーツの舞台裏　第12回　ドーピング

公平な条件でプレーを
選手の知識不足も深刻

スポーツの世界では、アスリートたちが肉体を駆使した華々しい活躍を繰り広げている。しかしその裏では、一部のアスリートがドーピングを行ってきた。ドーピングは、近代スポーツの負の側面の一部だ。

ドーピングとは、スポーツ競技などで好成績を挙げるために、筋肉増強の働きがあるたんぱく同化薬や、疲労や痛みを感じさせなくする働きがある興奮薬などの禁止物質を、服用、注射、あるいは外用することだ。体内から禁止物質が検出されなくとも、その所有や使用の企て、ドーピング検査の拒否なども禁止行為とされている。また、指導者によるアスリートへの禁止物質の授与やその企て、隠ぺいもドーピングとみなされる。これらには、幅広い観点から薬物乱用を防止するという目的がある」と、アンチ・ドーピング活動に携わる円井直樹准教授（体育）は話す。

一般的に検査で陽性反応が出ると、1回目は2年間の活動停止処分が科され、2回目が発覚した場合は永久追放となる。

近代スポーツ史上最初に確認されたドーピングは、1865年、オランダで行われた水泳大会でのこと。オランダ人選手による覚せい剤の使用だった。最近では、中国の女子柔道選手が、昨年の世界選手権でのドーピング検査で禁止物質に陽性反応を示した。彼女は一昨年の北京五輪で金メダルを獲得していたが、金メダルのはく奪と2年間の出場停止処分が科されることが決まった。

世界のドーピング検査での陽性率は、ここ約10年間で2％前後を行き来している。公表されている2005年の日本の陽性率は0・34％で、人数にして10人。日本の陽性率は世界的に見ても低く、同じ年のポーランドが6・6％、フランスが5・3％などヨーロッパで陽性率が高い傾向がある。陽性反応が出た物質ではたんぱく同化薬が最も多く、次いで興奮薬が多い。

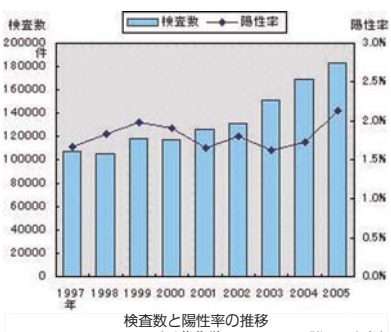
そもそも、なぜドーピングを禁止しているのか。「違反者を排除するためではない。真の目的は、全てのアスリートによる公平な条件のもとでのプレーを保証することだ」と円井准教授は言う。

競技後のドーピング検査では、競技終了後に速やかに検体（尿）の採取が行われる。検査の透明性を保つため、採尿には同性の検査員が立ち会う。もし過去1週間に何らかの薬剤を服用した場合は自己申告が必要だ。

スポーツとドーピングの関わりに比べ、ドーピングへの対処方法が確立してきたのはつい最近のことだ。オリンピックでドーピング検査が始まったのは1968年、検査の透明性を確保するために世界アンチ・ドーピング機構（WADA）が設立されたのは99年、財団法人日本アンチ・ドーピング機構（JADA）は2001年に設立された。JADAは「ドーピング防止のための選手必携書」を作成しデスリートに配布している。禁止物質や使用可能な薬物の情報は、WEB上からも閲覧が可能だ。

「多くの機関がドーピングについて情報を公開しているが、アスリートも自分から情報を積極的に得る努力が必要だ」と円井准教授は強調する。現に、日本国内のドーピング検査での陽性反応の8割が、禁止物質と知らずに服用していた「うっかりドーピング」だった。アスリートや指導者、各種機関など、スポーツに携わる人全ての努力があって初めて「クリーンなスポーツ」の実現が可能になる。

（本紙・根津彩香＝国際総合学類）



検査数と陽性率の推移
（三菱化学メディエンス㈱HPより）

全日本選抜柔道体重別選手権大会

現役、OGら5人が優勝

本学から7名が世界へ
各階級で活躍目立つ

柔道

平岡拓晃

秋本啓之

全日本選抜柔道体重別選手権大会が4月3、4日にかけて福岡国際センター（福岡市博多区）で開かれた。この大会は9月に東京で開催される世界選手権の代表選考も兼ねており、各階級8人ずつによるトーナメント形式で行われた。

本学からは平岡拓晃（体育1年・子徳寺学園）ら13人が出場。平岡が60㌔級、秋本啓之（同2年・同）が73㌔級、小野卓志（同）が90㌔級で優勝。粟野靖浩（体専4年）が73㌔級、西山大希（同2年）が90㌔級で2位に入った。他にも卒業生が多数出場し、福見友子（了徳寺学園）、杉本美香（コマツ）が優勝するなど、各階級で本学関係者の活躍が目立った。

60㌔級の平岡は1回戦、2回戦と格下の相手を危なげなく下し決勝に勝ち進んだ。相手は一番のライバルで、昨年12月のグランドスラム東京大会で敗れた福岡政章（綜合警備保障）。「昨年負けた相手なので、勝つことに集中した」と平岡。先手先手の組み手で相手を翻弄し、指導2つが相手に与えられ有効勝ちした。

試合を振り返り、平岡は「この大会に照準を合わせ臨めた。気持ちで相手を上回っていたことが勝ちにつながったと思う」と述べた。

73㌔級決勝は秋本と粟野の先輩後輩対決。「普段から練習している相手でやりづらかったが、がむしゃらに攻めた」と秋本。序盤から積極的に技を仕掛け、粟野に付け入るすきを与えなかった。中盤に差し掛かり、攻め手を欠く粟野に2つの指導が与えられ、そのまま試合終了。秋本が有効勝ちし、先輩の意地を見せた。

優勝した秋本は「初戦からモチベーションの高い状態で臨めた。世界選手権に向けて、気負わずに一戦一戦集中していきたい」と話した。粟野は「前半から押されっぱなしだった。終盤になってやっと攻め手がつかめてきたが遅すぎた」と試合を振り返った。

90㌔級の西山は、2回戦でライバルの吉田優也（東海大）を下し決勝に勝ち進んだ。相手は大学の先輩に当たる小野。国際大会3連覇中で現在世界ランク1位の小野に大外刈りや内股など多彩な技をかけられ、防戦一方だった。試合開始後2分、「攻められっぱなしだったので技をかけなければいけない」と内股を仕掛けたが、上手くかわされ、逆に内股すかしを掛けられて一本負け。

西山は「相手は試合の運び方が自分よりはるかに上手い。試合ではなかなか勝つことができないが、小野さんよりもよい成績を出せるよう頑張りたい」と次への意気込みを語った。

今大会を振り返って増地克之監督（体育・講師）は「平岡は攻める気持ちが全面に出ていた。秋本は速い攻めがよかった。世界選手権の代表として現役7名、卒業生を含めると9名もの選手が選ばれ正直驚いた。出るからにはコンディションを整えていい結果を出してほしい」と話した。

春季リーグ

日体大に勝利
バッテリー好調

野球

首都大学野球春季リーグが、4月10日から平塚球場（神奈川県平塚市）などで行われ、本学は4勝3敗で第4週を終えた（5月4日現在）。

平塚球場で24日に行われた日体大との1回戦。本学は4－0で快勝した。立ち上がりこそ良くなかった投手久保貴大（体専3年）だが、捕手の糸井慎太朗（同2年）の好リードでペースを取り戻し、相手に点を許さなかった。攻撃では、3回裏に相手の死球や暴投で1点先制すると、4回裏、相手失策で出塁した矢野健太郎（同3年）が、林竜希（同2年）の単打と大島建（同3年）の適時打で生還し、2－0とした。5回、7回に1点ずつ追加し、4－0とした。

川村哲監督（体育・准教授）は「バッテリーは大変良かった。打線も頑張ったが、もっと取れる場面はあったし、もっと取ってほしかった」と振り返った。

2回戦で敗れた本学は26日に、3回戦に臨んだ。この試合でも久保の好投が光った。低目にボールを集め被安打はわずか4。打線も大活躍した。3回裏に1点を先制してから得点が無かった本学。8回裏に二死と追い込まれるも、堀口敏太（同4年）が内野安打で出塁。すると、主将である野口直哉（同）が本塁打を放ち、2点を追加、本学は3－0で勝利。昨年日体大からは得られなかった勝ち点1をもぎとった。

今季リーグは5月23日まで行われる予定。これからの試合に向け、川村監督は「士気が高まっていてチーム状態は大変良い。全力をかけて戦っていきたい」と抱負を語った。

ブロックをする本学勢（嘉悦大戦）

春季リーグ

男女ともに勝利重ねる
女子はライバル下す

バレー

春季関東大学バレーボールリーグ戦が、4月10日―5月16日にかけて男子は駒澤大学玉川キャンパス体育館（東京・世田谷区）、女子は青山学院大学相模原体育館（神奈川県相模原市）などで行われている。5月4日時点で、男子は5勝1敗の1位、女子は同じく5勝1敗で2位となっている。

本リーグ戦は、新チームとなって初のリーグ戦。1部リーグに所属する女子は、4月18日に嘉悦大と対戦した。嘉悦大は、昨年12月の全日本インカレの決勝戦で、2部間の雪辱を果たした相手。第1セットを25―22で奪うも、第2セット、第3セットをそれぞれ15―25、20―25と続けて落とし逆転された。しかし続く第4セットは終始リードして25―18で終え、第5セットも17―15で奪い、セットカウント3―2で勝利。本学の強さを見せつけた。

中西康己監督（体育・准教授）は「結果は良かったが、新チームとしてまだまだ不安定な部分が多い。しかし、今後下級生が伸びていく可能性は大いにあるだろう」と話した。

また、2部リーグに所属する男子は、4月25日に宇都宮大との試合を迎えた。中盤では競り合うも、セットカウント3―2で勝利した。

室内選抜飛込競技大会

岡本が飛板飛込で2位
競泳では小林が3位

水泳

2010年度室内選抜飛込競技大会が4月3、4日の2日間、東京辰巳国際水泳場（東京・江東区）で行われた。

本学から出場した岡本優（体専4年）が飛板飛込では430・50点で2位、高飛込では369・75点で3位、シンクロナイズド3㍍飛板飛込では坂井丞（麻布大淵野辺高）と組んで3位に入った。

結果について、岡本は「環境や種目など、変化があった中では上出来だった」と語った。今後については「8月の日本選手権では優勝したい。また9月のインカレでは総合優勝し、日本一であることを証明したい」と目標を話した。

◇第86回日本選手権水泳競技大会が4月13―18日に東京辰巳国際水泳場（東京・江東区）で行われた。本学勢では、50㍍自由形で小林拓也（体専4年）が3位、百㍍平泳ぎで若月哲也（同3年）が4位、50㍍背泳ぎで有田真紀（同4年）が7位に入賞した。

小林は予選を23秒、準決勝を22秒90というタイムで通過。「だんだんタイムを上げていこうと考えていた」と振り返る。迎えた決勝、武田剛ヘッドコーチ（体育センター準研究員）は「最後の残り10㍍で他の選手を抜け」とアドバイス。小林はその通りにレースを展開し、ラスト15㍍までは5、6番だったが、そこから追い上げ3位でフィニッシュ。タイムは22秒67だった。小林は「高速水着が禁止されたが、昨年よりタイムが上がり、自分の能力が向上したのだと思う」と語った。

武田ヘッドコーチは「高速水着の禁止で、ベストタイムがあまり出ず、チームの雰囲気は良くなかった」と今大会を振り返った。これからに向けて「インカレで高順位を取れるよう練習させていく」と語った。

397・26点で優勝した。同競技では小林和真（体専1年）と大内嘉之（同4年）が組み、297・21点で3位となった。

筑波大学国際テニストーナメント

国公立大で初の国際大会

海外の若手選手集まる
イベントも同時開催

テニス

第1回筑波大学国際テニストーナメントが、4月3－11日に本学の主催の下、開かれた。国立大学が国際テニストーナメントを主催するのは初の試みだ。

テニスの世界男子ツアーはレベルやランキングによって、グランドスラムを頂点に6つのカテゴリに分かれている。今回のトーナメントはカテゴリの中の最下層、フューチャーズに位置する。国内のトップクラスの選手やアジアを中心とした国外の若手選手が参加した。本学からは石井靖晃（体専2年）や竹中健矢（同）らが出場した。

大会は、シングルスは内

音を頼りにボールの位置を確かめる

ら、息の合ったプレーを見せ会場からは拍手や歓声があがった。参加者の中には、障がいを感じさせないほどの腕前の人もいて、学生からは驚きの声が出た。

今回のイベントについて、東京都から参加した視覚に障がいを持つ男性は「回転の掛け方など、普段のブラインドテニスの練習ではやらないことを学べて勉強になった」と話した。また、参加者とペアを組んで一緒にプレーした清水一駿さん（体専2年）は「想像以上に一緒にプレーするのが難しかった。視覚に障がいがあるのにも関わらず、上手に打ち返していてすごいと思った」と話した。

◇

チャレンジイベントとして「球速王体験」及び「球速王コンテスト」が4月10、11日に本学テニスコートで行われた。当日受付で、誰でも自由に参加出来る本イベントには、生徒や学生、一般人から多くの参加者が集まり、大いににぎわった。

球速王とは、全国的に行われているサービスコンテストで、厳格なルールにのっとり、サービススピードを競うもの。1人6回のショットの中で、サービスコート内に入った最も高速の結果を公式記録として認定、インターネット上に公開される。

球速王体験では、プレイヤーをデジタルカメラでムービー撮影し、ショットの瞬間をスロー再生出来る機能を利用して、本学庭球部からフォームのアドバイスを受けた。

また、球速王コンテストには、高校生を中心に小学生からシニアまでの幅広い層から2日間合わせ30人が出場した。出場者はU－10からシニアまで8つの世代に分けられ、各世代の優勝者には、商品としてスポーツ飲料1箱が贈呈された。

牛久市から訪れ、U－12で110㍍を記録し優勝した松下栞奈さんは「初めて速度を測ったが、100㍍を超えたので良かった。優勝出来てうれしい」と語った。また、原伊吹さん（情科4年）の160㍍が、全体の最高記録となった。

はっぴ姿で「祭り」を表現

カヌースプリント海外派遣選手選考会

女子 4人が最終選考へ
男子 近藤が3位入賞

カヌー

2010カヌースプリント海外派遣選手第二次選考会が3月25－29日、府中湖カヌー競技場（香川県坂出市）で開催された。本学の選手では、シニア女子のカヤックシングル五百㍍で小野祐佳（体専2年）が4位、中野友貴（同1年）が10位、仲摩千陽（同3年）が13位、田畑薫（同1年）が14位に入賞し、5月に行われる最終選考会に進出した。また、同二百㍍では、中野が6位、仲摩が11位に入賞し、同じく最終選考会に進出した。

五百㍍決勝では、2位か4位までが1秒以内という混戦だった。小野は「決して万全ではなかったが、いいほうだったと考えている。だが満足はしていないので、最終選考会ではより上を狙っていきたい」と語った。

栗本宣和コーチ（体育科学系・準研究員）は全体の結果について「今後はさらに上を狙い、成績を上げるだけでなく、スポーツ界を担う存在になってほしい」と話した。

その他大会の結果は次の通り。

2010スプリングスプリント（4月25、26日、愛知県みよし市三好池カヌー競技場）【男子】▽カナディアンシングル五百㍍＝3位・近藤許仁（体専1年）2分00秒70

春季リーグ

女子 全勝でリーグ1位
男子 明治大に快勝

ハンド

平成22年度春季リーグ戦が4月10日－5月23日にかけて日本体育大学健志台体育館（横浜市青葉区）などで行われている。5月5日現在、女子は6勝でリーグ1位。男子は3勝1分3敗でリーグ5位。

■女子

国士舘大との一戦が、4月24日に行われた。先制点を決めたのは国士舘大。本学も作内杏那（体専4年）の得点で追いつき、その後は両者譲らぬ展開に。しかし前半15分からの5分間、本学の得点が決まらず、4－9と引き離される。本学はスカイプレーで得点するなど応戦するが、前半を9－13で終えた。

後半、国士舘大がミスで攻撃が振るわず、後半10分、山野由美子（同）の得点で同点に。試合は本学ペースになり、21－18で勝利した。

■男子

開幕2連勝した男子は、4月17日、明治大と対戦した。本学は開始42秒、相手のミスから速攻を仕掛け、高崎翔平（同）のシュートで先制する。試合が大きく動いたのは前半16分から。本学が4連続得点し、明治大を引き離す。本学のディフェンスに明治大が苦戦を強いられ、前半を13－8で折り返した。

後半は明治大のポストに点を奪われはしたが、本学リードで折り返した。本学リーグ戦で明治大は佐藤奏吉（同）らのカットインや速攻による得点で、明治大に追いつくチャンスを与えない。後半25分以降、明治大も粘りの攻撃を見せるも、26－18で本学が勝利した。

世界チームカップフラート競技選手権大会

日本代表が銀メダル

体操

フラート世界選手権の上位4カ国が2010年の世界一を競う、第5回世界チームカップフラート競技選手権大会が、3月28日、ドイツのフィネットロップで開催された。今大会は、大幅なルール変更後初めての大会。得点に上限がなくなり、高難度の技ほど評価されやすくなった。

前回大会で惜しくも3位だった日本だが、今大会は安定した演技を披露し、ドイツに次ぐ2位。代表4人には田村元延（体育2年）、高橋靖彦（同1年）や本学卒業生らが選出された。

田村は、斜転と跳躍を披露、斜転でミスしたものの、高難度の技をそつなくこなした。高橋は、跳躍と直転に出場。跳躍で落下するアクシデントもあったが、直転では落ち着いた演技を披露した。「悪い流れに流されず、直転では自信をもって演技が出来た。海外選手とメダル争いが出来るレベルに到達したい」と語った。

本谷聡監督（体育・講師）は「各々がしっかりと役割を果たす成熟したチームだった。ルール改正への対策もよく、次回大会に向け良い経験が出来たのではないか」と振り返った。

◇

ジャグリングやトランポリンなど、世界のさまざまなスポーツ種目のトップアスリート・グループを集め、パフォーマンスを披露する国際スポーツガーラが、3月27日、ドイツのフィネントロップで行われた。本学体操部が招かれ、Gボールを使った演技を披露した。

海外でGボールパフォーマンスを披露するのは初めてだったという体操部。本学の卒業生も含めた11人が演技した。「祭り」をテーマに太鼓や拍子木を用いた音楽に合わせ、ボールの上に乗ったり、弾んだりとユニークな動きで約900人の観客を沸かせた。演技中、ボールから落ちる一幕では、観客から悲鳴が上がる場面もあった。

顔

サッカーU－18元日本代表

信念持って「遠回り」
赤崎秀平（体専1年）

2008、09年の高校総体で全国3位。09年に行われたサッカーU－18日本代表のUAE遠征で、2得点を挙げチームに貢献。高校選手権では、ハットトリックの経験もあるなど、残した功績は多数。プロのクラブチームからも高く評価され、J1の浦和レッズからのオファーもあったが、赤崎秀平（体専1年）は、プロの選手ではなく、進学する道を選んだ。

赤崎は一年生ながらもトップチームに所属し試合にも出場している。ドリブルで突破したり相手ディフェンスの裏から飛び出したりする力を持っており、個人技を活かすスタイルが特徴だ。「ゼロか百か」という考えを持つFWの彼にとって、試合では点を取るか取らないかが全てだという。

高校生の頃に本学蹴球部の練習に参加した際、優れた指導者や部内の良い雰囲気に魅力を感じ、本学を選んだ。大学では、サッカーを感覚だけでなく理論として学ぶと同時に、他のいろいろなスポーツのことを学びたいと思った赤崎。著名なスポーツ研究者に加え、さまざまな種目で活躍するトップアスリートが大勢いる本学での生活は、毎日が刺激の連続だ。日本のスポーツ界の未来を支える者同士、互いを高め合う日々を送っている。

「良い指導者、アスリート達と一緒に、更に上を目指したい」と意気込みを話す。

赤崎が進路の選択を迫られたのは、大学入試が近づいてきた高校3年生の時。彼の元にJリーグ屈指のクラブチーム、浦和レッズからのオファーが来た。サッカー選手なら誰しが目指す道。しかし赤崎は誘いを断った。

「オファーはうれしかった。でも、クラブチームに入っただけでは意味が無い。試合に出ることで、初めて見えてくることがある。場所がどこであろうと学べるものはある」と自分の信念を貫いた。

高校最後の選手権大会では、延長戦の末に自身がPKを外してしまい敗退。悔いの残る形で本学に進学した。「進学させてくれた両親や応援してくれた周りの人たちに感謝しつつ、有意義な大学生活をしたい。自分が選んだ道が正しかったと思えるよう、進んでいこうと思う」と語る。風間八宏監督はそんな赤崎を「点を決めきれないことに責任感も抱いているだろう、まだこれから伸びる選手。慌てて結果を出すよりも、次のステージに向かって成長することが目標と考えている。

将来の夢はワールドカップに出場すること。そのためにはプロになることが前提であり王道だ。しかし赤崎は、容易にその王道を選ぼうとせず、自らの信念のドサッカーに打ち込んでいる。目先の肩書はいらない。常に先を見据え夢へと向かう彼は、この「筑波大学蹴球部」という道を、今歩み始めた。（本紙・野口尚喜1人文学類）

世界の教室から

サラマンカ大学（スペイン）

植松　祐太

君も冒険へ出かけよう

私は2008年10月から09年6月まで、スペインのサラマンカ大学国際コースに留学しました。筑波大学で2年半スペイン語を勉強した後、新しく大学間の協定が出来たと伺い、チャンスを逃すまいと留学を決意しました。

サラマンカ大学は、13世紀から続くスペイン最古の大学です。サラマンカは学生の街という点でつくばに似ており、大学も含めて旧市街丸ごと世界遺産の美しい街です。

元々私は世界を旅するツールとしてスペイン語を始めたので、休暇中は国内や周辺国へ旅に出掛けてヒッチハイクしたり巡礼したり色々な旅をしました。しかし旅にトラブルは付き物でバルセロナでは置引きに遭い、マドリードではスリに遭いました。2度も無一文になり、生きたくても生きられない状態でしたが、たくさんの人々のお陰で無事に今日まで生きてこられました。

留学後は同じくスペイン語圏の南米に渡って中南米などの秘境を飛び回る予定です。英語や第二外国語にやる気が湧かない筑波大生も多いと思いますが、それはその言語を実際に使う機会が無いからです。そんなあなたも、全てが目新しい日本語が通じない世界への冒険に出てみて下さい。そうすれば、絶対にモチベーション上がりますから。

（比文4年）

滞在最終日、マジョール広場でジャンプ！

で丸く収まります。

バックパッカーになり、1カ月掛けてアルゼンチン・チリ・ボリビア・ペルーを陸路で北上しました。当然この時もトラブルばかりで、アルゼンチンではナイフ強盗2人組に襲われたこともありました。これらの困難も全て無事に帰国した今では良い思い出になり、人間として成長出来ました。

就職活動では運良く第1志望の企業に内定し、

トラウムトレーニング

サッカー少年に指導

「本当の技術」教える

指導を受けながら練習する小学生

筑波大学スポーツアソシエーションと蹴球部が主催するサッカースクール「トラウムトレーニング」（協力：ジョイフル本田・つくばFC）が、先月10日から開始された。毎週月・水・土曜日に、本学の第一サッカー場やセキショウ・チャレンジスタジアムで行われている。代表を務めるのは、蹴球部の風間八宏監督だ。

このスクールは5―18歳の選手を対象とし、サッカーに必要な本当の基礎技術を身につけてもらうためとはドイツ語で「夢」という意味。選手だけでなく指導者や地域も共に成長をしながら、子供たちの夢を育てていくことが目的だ。

14日には水曜日のスクール第1回目が行われた。当日は12歳までの子供たち16人が参加、コートの半面を使ってパス練習やドリブル、ミニゲームを楽しんだ。

指導は本学の蹴球部の現役学生もコーチ兼プレーヤーとして加わった。

風間八宏監督は「選手も指導者も技術を学ぶことが出来る。若い世代がサッカーが出来るよう、人と地域が良い環境を作ってあげることが大切」と話した。

内藤清志コーチ（コーチ2年）は「上手くなっている事を実感出来ると、選手はさらに上手さを求めるようになる。そのために必要な本当の技術を、このスクールで身に付けてもらいたい」と話した。

Table For Two

ランチの売上金を寄付

途上国の子供の給食に

Table For Two（以下TFT）の文字と子供たちの写真が目を引くポスターが貼られた本学の厚生会第3学群食堂で、先月7―21日まで、「3食TFTウィーク」が行われた。イベントは一日限定50食で「TFTランチ」が販売。その料金のうち20円を開発途上国の子供たちの給食費として寄付するもの。

集まった寄付金1万円はウガンダなど3カ国に、給食費として送られる。

TFTランチのメニューは学生が考案したものだ。栄養バランスの良いメニューが、食生活の偏りがちな一人暮らしにはうれしい。値段も500円以下と手頃なため、多くの学生が注文する様子が見られた。

TFTは発展途上国の子供たちを飢餓から救い、同時に先進国の生活習慣病の問題に取り組む、日本発の取り組み。活動の中心はNPO法人、Table For Two International。今回の本学での活動は、同法人の本学支部が中心となって行われた。代表の秋山キナさん（国総2年）は、「今後もTFTランチは、毎週木曜日に50食限定で販売します。本学の他の食堂でも導入出来るように頑張りたい」と語り意欲を見せた。

宿舎懇親会

新入生が交流深める

生活マナー向上目指す

全代会生活環境委員会の宿舎班が主催する宿舎懇親会が、先月4日に追越、5日に一ノ矢、平砂宿舎で開催された。

この懇親会は、宿舎に入居する新入生の交流を深めるため4年前から開催されている。宿舎内の知り合いを増やすことで、宿舎生活を送る上でのマナー向上を図ることがねらいだ。

自己紹介をする新入生

会場に集まった新入生たちは、各棟ごとに円になり、自己紹介や、宿舎に関するクイズに解答した。質疑応答の時間も設けられ、宿舎生活に向けたさまざまな質問に、全代会委員が自らの経験も踏まえながら解答した。会場は終始にぎやかな雰囲気に包まれ、終了後は新入生同士で連絡先を教え合うなど、交流のためのよい機会になったようだ。

司会を務めた同委員会宿舎班長の高橋宏幸さん（数学2年）は「この会をきっかけに仲良くなっている様子が見られ嬉しい。新入生には、マナーを守りながら、存分に宿舎生活を楽しんでほしい」と語った。

キャンペーン支援活動

世界のお母さんの命守る

展示会や講演会も予定

本学の学内で、国連人口基金（UNFPA）東京事務所が実施している「お母さんの命を守るキャンペーン」を支援する活動が行われている。活動の中心となっているのは渡邊終子さん（国総2年）だ。

「お母さんの命を守るキャンペーン」は世界中のお母さんが置かれている厳しい状況について、一人でも多くの人に知ってもらうことを目的としている。国連を中心に国際社会が取りまとめた「ミレニアム開発目標（MDGs）」の目標5、「妊産婦の健康の改善」の達成が最も危ぶまれていることを受け、東京事務所が打ち出しているキャンペーンだ。実施期間は昨年6月22日から今年7月11日の約1年間。このキャンペーンに賛同するサポーターも同時に募集している。

渡邊さんは学外でNGOの勉強会に参加した際、NGOを通して「お母さんの命を守るキャンペーン」を知り、自らサポーターとして登録する共に、本学でもキャンペーンを知ってもらう活動をしようと思ったという。昨年12月から学内での活動を始め、現在は渡邊さんを含む5人が中心となって進めている。

学内では学生だけでなく教員や学職員に対しても広報活動を行い、このキャンペーンのサポーター登録を呼びかけている。来月10―14日には展示会を、14日には学内に国連人口基金東京事務所長を招いての講演会を催す予定だ。

渡邊さんは「本学でも多くの方にこのキャンペーンや世界の現状について知ってほしい。国際協力に興味はあるが、きっかけがつかめない学生にも行動を起してもらいたい」と話した。

問い合わせ＝国連人口基金東京事務所「お母さんの命を守るキャンペーン」支援実行委員会　support_mothers@hotmail.co.jp

---

全学学類・専門学群代表者会議

今年度の議長決まる

今年度初めての全学学類・専門学群代表者会議（2004年）が行われた。今年度の議長には田幡琢磨さん（人文2年）、副議長に若宮浩司さん（社工2年）が選ばれた。全代会副議長は原則2名だが、今回は立候補者が1名のみだったため、決定は5月19日の第2回本会議以降に持ち越された。

会議後半には、コインランドリーに関する要望という議案が審議された。コインランドリー導入の際には全代会と大学、業者との間で約束事が交わされた。しかし、両替機の設置や乾燥機の数を導入前と同じにするなどの一部の約束が守られていないため、今回の議案はそれらを全て果たしてほしいという内容だ。議案は賛成多数で可決され、大学と業者へ提出される。

田幡 琢磨

若宮 浩司

本会議が先月28日、3A

今年度の抱負について、議長の田幡さんは「全代会構成員の本会議への出席率を高め、全学の学生の代表としての全代会を実現していきたい」と話した。また、副議長の若宮さんは「昨年は審議に十分な時間を割けなかった。それぞれの議案に時間をかけてきちんと審議していきたい」と話した。

学生論壇 ―社会への声―

歴史「ブーム」で終わるな

今年は平城遷都1300年である。それを記念してか平城京に関する本もたくさん出ている。数年前にはマスコットキャラクターである「せんとくん」も誕生し、今年の奈良は大いに盛り上がっているだろう。

以前から復元模型などが作られ近年では実寸大の建物も復元されたりと、当時の都を、ゆっくりとだが、知ることができるようになった。しかし一方で発掘や調査は終わっておらず、また未解明な部分が多く残っている。さらに平城京跡の上には今、電車の線路が通っている。仏教の力で守ろうとした都も現代の生活向上花には勝てなかったと言えるだろう。残念なことである。

さて盛り上がりとは最近「歴女」もブームになってきた。歴史が好きな女性を指す言葉で、昨年あたりからメディアでも取り上げられるようになった。最近の大河ドラマやゲームの影響もあってか戦国期以降の人物が人気のようだが、奈良時代では誰に人気が集まるだろうか。皇族出身である長屋王や橘諸兄か、それとも藤原不比等の四子や仲麻呂かっただ一つ心配なことは「歴女」が間違った知識を持ってしまうことである。それだけは気をつけてもらいたい。

平城京が造営されてから1300年。個人的には完全な平城京を見てみたかったが、なかなかそうはいかない。しかしこれを機に平城京の発掘やそれに伴う文化財の保護が一層進むことを願いたい。

（歴史探訪会・庄子亮平＝人文3年）

ゆりのき保育所

13人が入所

ゆりのき保育所（追越共用棟1階）の新規入所者が決まった。

4年目となる今年度の新規入所者は、月極保育者と一時保育者を合わせて13名。昨年度末までの退所者は4人で、保育所の全入所者は54名となった。

ゆりのき保育所では、本学教職員の生後57日以降の子どもを受け入れている。定員60人のうち、3歳児以上のクラスに6人受け入れ数の余裕がある。

バンクーバー五輪・パラ五輪

オリンピック・パラリンピック選手来校

新田さん、新谷さんが講演

金メダルに触れる場面も

バンクーバーパラリンピック大会において、ノルディックスキー距離男子10キロクラシカル立位、同男子1キロスプリントクラシカル立位で金メダルを獲得した新田佳浩さん（日立システム・平成14年度体育専門学群卒）が、先月27日、本学を表敬訪問した。

新田さんが山田信博学長に今大会での成績報告を行い、学長からはねぎらいの言葉が送られた。時折笑いが交じる和やかな雰囲気の中、新田さんのこれまでの競技人生や、障がい者スポーツの現状について語り合った。山田学長は「卒業生の活躍は在校生にとっても刺激となる。次のソチ大会での2連覇に向けてこれからも頑張ってほしい」と話した。

訪問後には、「パラリンピック冬季競技大会報告会――新田佳浩君語る」と題して講演会が行われた。始めに新田さんは、パラリンピック選手に対する国の支援が、オリンピック選手の10分の1しかないことや、スペインやドイツなどの欧米に比べ、日本は支援が不十分であることを訴えた。その上で、ジュニア世代の育成に尽力していきたいという展望を語った。

また今大会の勝因の一つに、トレーナーとのコミュニケーションが十分に図れたことを挙げ、「戦う時は一人だが、金メダルはみんなのおかげ」と話した。

講演会終了後には、学生が新田さんと記念撮影をしたり、談笑したりする場面が見られた。また新田さんの計らいにより、来場者は金メダルを触ることが出来た。今期のパラリンピックのメダルは四角形をしており、裏には「バンクーバーパラリンピック」と英語、フランス語表記に加えて、点字表記もされている（左写真）。

学長と握手を交わす新田さん

講演を聞いた大文学類3年の女子学生は「金メダルを触れるなんて思ってもみなかった。とても気さくな方で、お話も面白かった」と話した。

◇

バンクーバオリンピックスピードスケート女子五百メートル代表の新谷志保美さん（竹村製作所・平成10年度体育専門学群卒）のオリンピック報告会が先月25日5C216で行われた。

今回が初のオリンピック出場であった新谷さん。大学時代はインカレ五百メートル、千メートルの2種目で3連覇を果たした実績の持ち主。しかし大学4年のソルトレイク、4年前のトリノでは代表に選ばれなかった。オリンピックの大舞台を経験出来た喜びを「限られたチャンスを手にすることが出来、あきらめず続けてよかった」と語った。

オリンピックの開会式について、新谷さんは「光の演出、舞台演出が美しかった。まるで屋外にいるかのような、幻想的な式でした」と語った。

慌ただしい日程の中、体調管理のために、日本食を持ち込むなどして、最高の滑りを目指し挑んだ。順位は14位に終わり少し悔いの残る結果だが、練習を積んだ力は出し切れたと振り返った。

個人競技志向が強いアイススケートだが、オリンピック期間中は、まるで団体競技のように雰囲気が良く、選手間でお互いに刺激し合えそうだ。「男子アイススケートでメダルを獲得した時は、自分のことのように喜んだ」とチームとして五輪を戦った様子がうかがえる。

アイススケート部の渡辺瑛季さん（地球3年）は「部から初めてオリンピックに出場した新谷さんの話が聞けて光栄。自分も大会に向けて練習に励みたい」と刺激を受けていた。

最後にアイススケート部から贈呈品として新谷さんの滑走写真が送られると、暖かい拍手に包まれた。

パネルは学内に展示される

第3回筑波学生文芸賞

応募締切は6月30日

受賞作は雙峰祭で配布

学生が運営を行う地域密着型の文学賞、第3回筑波学生文芸賞の作品募集が先月1日から始まった。応募締切は6月30日。

募集枠は400字詰の原稿用紙80枚以内の一般部門と、同10枚以内のベリーショート部門。ジャンルは問わない。発表済み作品でも、掲載誌がサークル誌などの非商業誌であれば応募出来る。

一般部門から大賞1作と佳作2作、ベリーショート部門からベリーショート賞を3作程度選出する。受賞作は同賞運営委員会が発行する冊子に掲載され、10月に開催される本学の雙峰祭で無料配布される。

応募資格は、つくば市に住む専門学生、短期大学生、大学生、大学院生の作品であること。応募者がつくば市内に在住していれば、在籍している学校がつくば市外でも応募出来る。

同賞運営委員会委員長の谷秀次郎さん（心理3年）は、「熱のこもった力作を楽しみにしている」と話した。

同賞運営委員会では、運営スタッフ、一般選考委員も募集している。詳細は同賞ホームページ＝http://thaward.com/＝で。

違反駐輪・放置自転車

身体障がい者に及ぶ危険

マナーを守った駐輪を

本学構内において、自転車の違反駐輪が問題となっている。マナーの悪い学生が駐輪スペースから外れて停めた自転車が、通行の妨げとなるケースだ。学生生活課の職員や各代会の学生が、マナーを守った駐輪を呼びかけている。

身体に障がいを持つ学生にとって、違反駐輪によって生じる危険は大きい。違反駐輪の自転車によって通路が狭くなるせいで車いすが通れなかったり、点字ブロックがふさがれて前に進みにくくなったりする。

また、放置自転車も問題となっている。その多くは、学生が構内に自転車を放置したまま卒業していくことによるものだ。そのため在学生が駐輪スペース内に自転車を停めることが出来なくなり、違反駐輪・拍車をかけていることも指摘されている。学生生活課によると、年約1200台の放置自転車が職員によって撤去されている。

自転車のマナーを守ることで、改善出来ることがある。「周りがやっている」、「別の原因がある」などという考え方は捨て、もう一度自分のマナーを見つめ直す必要があるだろう。

暴行未遂事件

犯人は逃走中

夜間には注意を

本学女子学生が3月下旬、夜間に桜地区を歩いていたところ、何者かに暴行されそうになるという事件が発生した。女子学生が犯人を払いのけ、大声を出すと犯人は逃走。同地区では同様の事件がこのほかに2件発生しており、犯人はいまだ逮捕されていない。

本件では女子学生が明るい市道から横道に入ったところ襲われたという。夜間は出来るだけ明るく人通りの多い道を選んで通行しよう。

あくまで探訪 tanbo

少林寺拳法部

心と体を共に鍛える

「我等此の法を修めるに当り、祖を滅すず師を欺かず、長上を敬い、後輩を侮らず、同志互いに親しみ合い援け合い、協力して道の為につくすことを誓う……」。武道館1階の古武道場に少林寺拳法部の気合いの入った声が響く。少林寺拳法の心構えを唱えて精神を集中させ、すっきりとした気持ちで練習に取り組むため、練習前に必ず行う。この心構えは人生全に通ずることと思う」と山田耕太さん（社学2年）は話す。

「入づくり」を最も重要な目的とする少林寺拳法では、練習を通して技の技能だけでなく精神も鍛える。少林寺拳法部の練習は「突き」や「蹴り」、更には相手の攻撃を受けた時の動作である「受け」などの基本動作から始まる。それぞれの動作を行うごとに気合いの声が発せられる。意識的に声を出すことで気合いと集中力を高めることがねらいだ。そのため、練習時の部員の表情は真剣そのものだ。

だが、練習全体が緊張感の漂う中で行われるわけではない。「全体術技」というメニューでは、学年問わず男女を問わずお互いに技を掛け合うため、和気あいあいとした雰囲気だ。この練習を通して下級生は上級生から直接技術を学ぶことが出来、部全体の技術力向上につながる。

武術としての少林寺拳法の特徴は護身術的な要素が強いことだ。相手からの攻撃をまず守ってから攻撃するという「守主攻従」に基づいている。この点は、一見似ている空手と異なる。空手は自分から攻めていくことを重視するが、少林寺拳法は守りを重視する。相手に腕をつかまれた時に「鈎手（かぎて）」という技を使ってそれを解き、その後攻撃するというのはその例の一つだ。

また、少林寺拳法は人体の急所をうまく利用するため、小さな力で相手を制することが出来る。そのため、高齢になっても続けられる。「60歳のおじいさんに簡単に投げられた時はさすがにびっくりした」と部長の高橋晃一さん（工シス3年）は話す。さらに、小柄な女子部員が体の大きな男子部員を投げ飛ばすことも日常茶飯事だ。「体が小さい自分でも相手を投げることが出来るのはうれしい」と小黒麻美さん（生資2年）は話す。

「入づくり」を目的とし、技術を習得するだけでなく人を人間としても成長させてくれる少林寺拳法。練習を通じて得た健康的な肉体や不屈の精神は、社会に出てから必ずやその人の力となるであろう。（本紙・西川大照＝社会学類）

■訂正とお詫び

本紙第284号19面掲載の優秀学生顕彰事業の記事で、「3eカフェ」とするところを「エコレンジャー」と誤って掲載いたしました。お詫びして訂正いたします。

早期修了プログラム説明会

筑波・東京両キャンパスで

社会人のための博士後期課程早期修了プログラム説明会が開かれる。同プログラムは一定の研究業績や能力を有す社会人を対象に、標準修業年限が3年の博士後期課程を最短1年で修了、課程博士号を取得させるもの。説明会は、6月18日（金）午後6時半―8時、春日エリアのメディアユニオン2階情報メディアホールで。19日（土）午後1時半―3時、秋葉原ダイビル15階本学法科大学院ゼミ室で開催。参加希望者は、早期修了プログラム事務局まで。当日参加も可能。問い合わせ＝jimu@souki.tsukuba.ac.jp

「アルゼンチンの日」

講演や講習会などを予定

建国200周年を迎えるアルゼンチン共和国への理解と交流を深めることを目的に、経済・公共政策マネジメントプログラム主催、人文社会科学研究科共催で「アルゼンチンの日」が開催される。

ポルスキ駐日アルゼンチン大使による歴史や政治、経済に関する講演を予定。また、日本タンゴアカデミー副会長の飯塚久夫氏による、アルゼンチンタンゴの歴史についての講話、タンゴの講師を務めるセサル&イヴァナの2人による本場タンゴの披露やタンゴ講習会が用意されている。レセプションでは地元の飲食物が振る舞われる。

日時は5月18日（火）の午後3時―5時40分まで。場所は大学会館国際会議室。レセプション、タンゴダンス発表は総合交流会館多目的ホール。催しは英語で行われ、同時通訳はない。問い合わせ＝029・853・6785

小学校教員資格認定試験

説明会を開催

金曜学群教職課程委員会が「小学校教員資格認定試験」説明会を開催する。内容は試験についての概要とともに、その試験対策について。参加を希望する学生は、5月25日（火）までに世話人にメールで連絡すること。当日参加も可能。

5月26日（水）午前11時40分―12時10分（時間厳守）。2H201教室にて。世話人は吉田武男教授（教育）。メール＝joschida@human.tsukuba.ac.jp

Who's Who?

「家族力大賞'09」東京都知事賞受賞

石井 芳佳 さん （看護・医療科学4年）

受賞を喜ぶ石井さん（右）と北千住の「お母さん」

北千住で見つけた暖かさ 伝え合うことを大切に

「ただいま！」と、大学からの帰りに北千住にあるお母さんの居酒屋をおとずれる石井芳佳さん（看護・医療科学4年）。いつも元気に迎えるお母さん。「今日も元気がいいねえ」と、にこにこ笑っている常連さん。これが、「みんなが、笑った～下町が教えてくれた家族愛～」と題し、「家族力大賞'09～家族や地域の『きずな』を強めよう～」で最優秀賞にあたる東京都知事賞を受賞した石井さんの作文の風景だ。

「家族力大賞」は、東京都社会福祉協議会が主催する作文コンクール。生活の中で、家族のつながりや、家族を越える地域のきずなを見つけたり、広げたりした体験談を募集している。

だが、これは彼女の本当の家族のある風景ではない。13歳年上の姉は、石井さんが幼い頃に勘当され、家を出て行った。家に居れば両親のけんかが絶えず、はしや掃除機などが飛び交った。母のぐちを聞くのは石井さんの役目。これが彼女の描いた本当の家族の姿だ。

九州を出ることに反対する父に、「本学を受験したい」と初めて本音を言った。会いたい教授とやりたいことがある本学を、父を説得して受験、福岡から1人上京した。

石井さんが北千住に住むようになったのは、昨年4月のこと。ある日の昼、ふと商店街を歩くと「ここは下町でいい雰囲気だ」と気付いた。なぜ地域のつながりが強いのかを知りたくなり、その日のうちにアパートを契約した。

最初に触れた「お母さん」はある居酒屋のママさん。「その居酒屋からは笑い声が絶えず、引っ越し当初から気になっていた」と語る。石井さんも「お母さん」も九州出身で意気投合、ほぼ毎日通い仲良くなった。

居酒屋の「お母さん」を始め、地域の人々と家族のような付き合いを築いていった石井さん。「我が家はバラバラだ」と自身の家族を思ったのは、和気あいあいとした商店街や居酒屋、笑いあう家族といった、「北千住」のつながり合いの風景の中でのことだった。

「姉と父を仲直りさせよう。そう決意し、無理を言って姉と帰省。初日、父は井上さん姉妹と会おうとしなかったが、翌朝戻り、家族4人が揃った。いつ以来か分からない、何気ない日常。滞在最後の日の夜には、父がふとはしを置き、「君たちには苦しい思いをさせてしまった。本当に、すまない」と、頭をげた。家族みんなが泣いた。

石井さんは北千住での出来事や、福岡で家族を仲直りさせた体験をつづり、東京都知事賞を受賞した。賞金の半分は「感謝会」と称して「お母さん」の居酒屋の人々と楽しんだ。北千住で学んだことを「お互いに伝えることが大事と知った。そこで学んだことをつくはでも伝えたい」と語った。

本学の現状を「いろんな考えを持った人が近くにいるのに、互いによく知らない。他野の考えとぶつけあった広い視点や新しい発想は社会に出てきっと役に立つはずだ」と話す。

まだ家族には作文を見せていないという石井さん。家族という存在について「家族は利害関係なく付き合っていきたいと思える人。そういう意味で、大学や北千住で私はたくさんの家族と言える人と出会った。この出会いは一生大事にしていきたい」と語る。夏には発展途上国の医療事情を見るためにインドに行くという。そんな彼女が持つ「人とのつながり」は、誰よりも重く、そして強い。（本紙・森田聡＝社会工学類）

編集後記

天気に恵まれたGWも終わり、だんだんと陽も長くなってきました。もう夏がすぐそこに来てますね。夏の計画を立てるなら「筑波おろし」のK君の例も参考にしてみては？

夏といえば「大人にとってビールのおいしい季節。でも、羽目を外しすぎるのは良くないですよ。特集面では、学生の身近な問題への危機意識を喚起しています。6面右下の「回復体位」に注目。苦しそうな顔のN君ですが、お酒は一滴も飲んでません。彼の演技に編集部一同、大絶賛でした。20歳以上の人は飲み過ぎ、はしゃぎ過ぎに注意！

今回の紙面は「IMAGINE THE FUTURE」一色!!GWは久しぶりの青空一色!!だったようですが、私たちのGWは紙面づくりに捧げられました……（編集長＝光安素子・人文3年）

次号は **6月14日(月)** 発行予定です

筑波自然図鑑

◇ホソミイトトンボ◇

撮影地＝宝篋山（ほうきょうさん）

ほかのトンボに比べ体全体が細長く、体長は約30㍉前後。浅い池や沼地で浮かぶように飛ぶところを観察出来る。この昆虫は一部が成虫で冬を越すことが知られており、それぞれ夏型と越冬型に分けられる。夏型は越冬型より少し体が小さく、体色が緑がかっている。越冬型は夏から秋に成長し、成虫のままを越す。春には水辺に現れ繁殖行動を行う。この時、冬の間褐色だった体色が変化し、鮮やかな青色に輝き美しい。（写真・文＝大高頌平、エシス3年、野生動物研究会）

催事

演奏会

◆筑波大学管弦楽団第67回定期演奏会

5月15日（土）、つくばセンタービルノバホールで。午後1時15分開場、午後2時開演。全席指定で入場料はS席が1200円、A席が1000円。

指揮者に海老原光さんを迎え、ドヴォルザークの交響曲第7番二短調作品70、シューマンの「序曲、スケルツォとフィナーレ」作品52、スッペの喜歌劇「詩人と農夫」序曲を演奏する。

筑波大学出版会 新刊案内

森林学への招待

中村徹 編著

人類に多大な貢献をしてきた森林。はたしてその実態はどうなっているのか。森の遷移、水と土壌、森林のDNA、地球温暖化と森林、などの視点で、森林の本質をわかりやすく解説。自然科学だけではなく、文学や芸術の視点も加えたユニークな本となっている。

好評「草原の科学への招待」に続く第二弾！森林学の専門家のみならず、幅広い読者にお薦めしたい一冊。編著者は本学生命環境科学研究科教授。購入は学内の書籍部、全国の書店、Amazonなどで。税込1995円。

大学会館書籍部ベストセラー

1	1Q84 BOOK3	村上春樹/新潮社
2	公務員試験速攻の時事問題 22年度版	実務教育出版
3	日本人の知らない日本語2	蛇蔵・海野凪子/メディアファクトリー
4	1Q84 BOOK1	村上春樹/新潮社
5	大学生のためのレポート・論文術	小笠原喜康/講談社
6	日本人の知らない日本語なるほど～×爆笑！の日本語	蛇蔵・海野凪子/メディアファクトリー
7	ボトルネック	米沢穂信/新潮社
8	1Q84 BOOK2	村上春樹/新潮社
9	五輪書	宮本武蔵/岩波書店
10	兵法家伝書	柳生宗矩/岩波書店

今月の1位は、村上春樹「1Q84」待望の3巻。人物たちのその後が新たな切り口で描かれる。

9、10位には、近世武道書の名著がランクイン。ビジネス書としても読まれる「五輪書」。具体的、合理的に書かれた剣法の奥義に、多くのアイデアを得ることが出来る。

新学期の辞書フェア開催中。今月31日まで共立出版理工書15％オフフェア。6月1日から言語学15％オフフェア。